

3759
Y019
資料室

雄日

師範學校
國文教科書

本科用

訂正十四版

卷五

42563

教科書文庫

4
810
51-1912
20003
02274

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

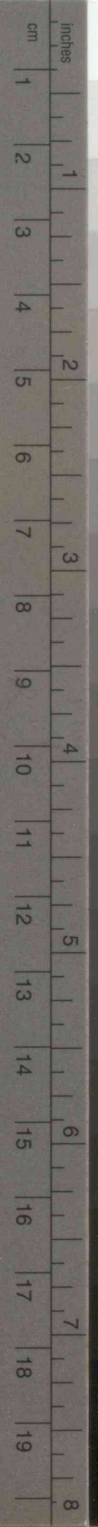


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



9959
Y019

資料室

文部省檢定
明治四十五年二月十三日
師範學校國語教科書

吉田彌平編

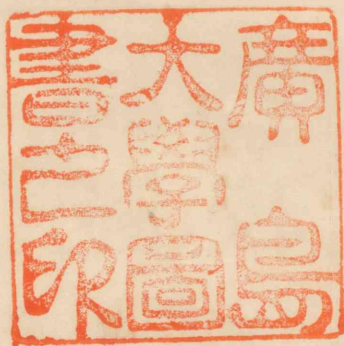
本科用



師範學校
國文教科書

東京
光風館藏版

卷五



師範學校 國文教科書 本科用 卷五

目次

一	松下村塾	……………	一頁
二	妹にさとす(候文)	……………	五
三	死と永生	……………	九
四	浦島前曲(新曲)	……………	三
五	現代の文學	……………	六
六	花の雲(俳句)	……………	四〇
七	平泉	……………	四

目次

一

八	百蟲譜……………	横井也 有 壘
九	知足菴の記……………	村田春海 吾
一〇	西行法師……………	上田秋成 壘
一一	江戸時代の文學……………	藤岡作太郎 壘
一二	雲の影(口語文)……………	幸田露伴 壘
一三	不二の神山その一……………	遅塚麗水 七
一四	不二の神山その二……………	遅塚麗水 壘
一五	國體の精華……………	穂積八束 一〇
一六	王陽明……………	末廣鐵腸 一〇
一七	月雪花(口語文)……………	芳賀矢一 一六

一八	比良の山風(和歌)……………	…………… 一七
一九	新島守……………	…………… 一〇
二〇	日野の閑居……………	鳴 長 明 一三九
二一	羽衣(謠曲)……………	…………… 一四
二二	鎌倉室町時代の文學……………	…………… 一五

師範學校 國文教科書 本科用卷五目次終



師範學校 國文教科書 本科用卷五

一 松下村塾

長門口菽、東、松本村三郎
松下村塾、吾人はこの名を聞く毎に、教育上、箇人の勢力の偉大なるに想到るを禁ずる能はず。松陰が村塾を創めし時、歳纔かに二十六。その死、三十歳を去ること四年に満たず。村塾の家矮にして陋。室唯二、六疊と八疊とのみ。松陰、居常平生、弟子と共にその中に起臥し、飲食し、教授し、談論せり。かゝる少壯

寺蹟一人地及びわが
不思議なる事蹟
文中子一姓名、又は通文
文中子一姓名、又は通文

*天之生此民也。使先
知覺後知
使先覺覺
後覺也。予
天民之先覺
者也。予將
以斯道覺
斯民也。非
予覺之而
誰也。

の身を以て、かゝる矮屋の下に於て、かゝる短日月の
間に、濟々たる多士を收容し、養成し、感化して、以て、維
新の宏議を翼贊するに至らしめたるは、殆ど一の奇
蹟なるもの、如し。如今廊廟棟梁器多是松門受教
人。といふもの、決して虚語にあらざるを見るなり。
昔、唐の興りし時、賢臣多く文中子の門に出でたりと
稱す。然れども、これを松陰が感化の大なるに比す
れば、猶其の及ばざるものあるを覺ゆ。
松陰は斯民の先覺者を以て自ら任ぜり。彼は如何
にして天下を拯はんとせしぞ。古來の英雄、多くは

王覇一王道と新道あり
王道は善徳を以て下は歸
す。新道は智謀と威武
を以て下は歸す。

振古未嘗有
なり。吾人未だ曾て有ら
ざるなり。

手を以て天下を拯へり。手は術なり。松陰は曰く、
我は道を以て天下を拯はん。王覇の岐る、所は道
と手との相違のみ。術を以て人を弄し、智を以て世



(藏三原田吉) 松田 吉

を馭し、自己の誠意に基づ
かず、一身の實行に本づか
ざるは、皆道を以てするに
あらず、手を以てするなり。
と。

嗚呼、今の時は如何なる時ぞ。吾人、生れて幸に振古
未曾有の盛世に遭逢し、まのあたり國運の隆々とし

て興起するを見るを得たり。思ふに、帝國發展の道は固より一にして足らずといへども、その基礎たるものは他にあらず、實に教育の進歩にあるのみ。是正に古今東西の歴史が吾人に告ぐる所なり。吾人已に志を立て、一身を教育の事業に捧げんとするに際し、遙かに前程を望めば、固にその任の重くして道の遠きを知ると雖も、然れども、村塾の成果を顧みて、箇人の勢力の偉大なるを想へば、また私かに期する所なくんばあらざるなり。(和近世教育史に據る)

二 妹にさとす

吉田 松陰

この間は御文下され、観音様の御洗米、三日の精進にいたゞき候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進、潔齋などは、随分心のかたまり候ものにてよろしき事と存候につき、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候へば、酒肴ども一向たべ申さず候。その間、一度靈神様御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にもこれなく、御深切の事に候へば相果したく存候

*安政六年四月十三日松陰が野山の獄に在りて長妹千代子に與へしもの。

御洗米
精進
酒肴
御祭
靈神様
吉田家の祖
先の靈を祀る

へども、當所にては、あたりまへの精進の外にまた精進と申候うては、連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね候につき、それを仲間それと相答へ候事面倒に存候故、八日よりさいはひ精進日なれば、その日一日にいたゞき申候。

そもく、観音様信仰せよとの事は定めし禍をよけ候ためなるべく、これには大いに論のある事に候へば、委細申進ずべく候。法華經第二十五の卷普門品たはらと申すに、観音力と申す事高大に述べてこれあり候。大意は、観音を念じ候へば、

法華經 靈鷲山
 此經加八年間の後
 法を河難角考の法華
 せむも、四生什三藏の
 譯して一却八巻を三八品
 あり

*方言、微塵
 などの意。

繩目にかゝり候へば忽ちぶつくと繩が切れ人屋へ捕はれ候へば忽ち錠鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちんぢに折るゝなど申してこれあり候。これは、拙者江戸の人屋にてこの經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれよりありがたき事はなしとて信仰するも無理はなく候。さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘小乗と二つに分ちて、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乗に

二 妹にさす

七

小乗一佛教の初を減じ
 少利益をあるさる教
 大乗一佛法の圓満深き
 身理を説くもの
 小乗一大乘の道理は俗
 人身に入りかたければ方
 便に説かば身理の教
 上根下根 根はせられたる
 生れつきのすむれたるもの
 上根といひ考れしを下根といひ

心不亂心不亂に注ぎ
 一少一多の事に向け
 ことごと
 退轉心不亂の反対
 心乱心乱ること
 難難
 難難

て申候へば、観音は右の經文の通りのものと心得、^{ひたすら}ひたもの信仰せしむることに御座候。これは大いに信を起さするためなり。信を起すとは、一心にありがたい事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なきことにて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨み候うてもちつとも頓著なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ候ゆゑ、世の中に、如何に難題苦患の來るとも、それに退轉して不忠不孝無禮無道等仕る氣遣ひはなし。されど、初より凡

方便方便
 方便方便
 方便方便

*法華經第七
 化城喻品。

- 一 士道莫大於義我因勇行勇
- 一 因義長
- 一 士行以質實不欺為要以化詐文過為恥光明正大皆由是出
- 一 成德建材師恩友益多
- 一 百故天子慎交游
- 一 死而後已四字言簡而義該堅忍果決確不可拔者舍是無術也

二 平而極其深

(内の則七規士) 蹟筆 陰松田吉

夫に、一心不亂の不
 退轉のと申しきか
 せても、少しも耳に
 入らぬものゆゑに、
 かりに觀音様を拵
 へて人の信を起さ
 せ候教に御座候。
 これを方便とも申
 候。これにつきて、
 法華經に都上りの

二 妹にさすとす

九

出世法——生老病死の四苦
を免るゝ法

釋迦——釋迦は種族の名
本名は悉曇達多

*迦比羅城主
淨飯王。

喩これあり至極面白く候へども、事長ければ略し申候。
さてまた大乘と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候うても、立身出世など申す事には御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては我が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては我が身も往くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲を發し、生老病死がこ

濟度——衆生を救ふこと
濟らて彼らへ渡すこと

の世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまざると志を立て、年二十五の時位を棄て、山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さ候うて三十出山とて、わづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出て來て、それより世の人を教化せられたり。これが即ち出世法なり。故に、出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、即ちこの世の人を濟度することに御座候。

二 妹にさすとす

二

さてその死なずと申すは、近く申さば釋迦の孔子のと申す方々は、今日まで生きて居らるゝ故人が尊みもすればありがたがりもし、畏れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は刃ものに身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀のちんぢに折れたる證據なり。

さてまた「禍福繩の如し」といふ事を御悟なるが

淮南子に見ゆ。

宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人閒萬事塞翁が馬に御座候。このわけは物知に問うて知るべし。拙者など、人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世へも残り、かつ辛うじて死なぬ人々の仲間入りも出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出て候へば、また如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論、その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の閒難儀だにせば、先には福あるべし、何の

天道虧^レ盈
而益^レ謙。
杉民治
吉田寅次郎
杉千代子
(兒玉兵衛門妻)
杉壽子
(小田村素太郎妻)
杉麗子(天)
杉美和子
(久阪隆助妻)
杉敏三郎

效驗もなき事に、観音に頼みて福を求むるやりの事は、必ずく、無益に存候。尤も右の通りに申候へば、身勝手なる申分不孝なる申分と御存あるべきか、こゝにまた論あり。易の道は満盈と申すことを大いに嫌ふなり。御互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶は夭折、敏は啞子、ふぎまのわるきやうなるものなれど、あと四人はいづれも可なりに世を渡られ、特に兄様そなたも小田村は兩人づつも子供があれば不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家

を見くらべよ。これ程にも参らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にて、高須などにて、も、兄弟の内にはわるき人も随分あるなり。然れば父母兄弟の代りに拙者、艶、敏の三人が禍を引受くるにこそと思ひ候は、父母様の御心も濟まる、譯には候はずや。且、松陰の生か杉は随分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、卻つて杉が氣遣ひなるものなり。拙者身の上は前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は随分あれど、杉は今にては御父子とも御

御父子とも云々
矢杉常道は
長洲の治獄
更りて、
民治は藩
學の助教なりき

*杉常道隱逸の地。萩城の東方護國山麓に在り。
此時此家は今夏羽衣りき

役にて何の不足もなき中なれば、子供等がいつもこの様なるものと思ひて、昔山宅にて父様母様の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年七十年の事をとくと手を組んで案じて見られよ、氣遣ひなるものにては候はずや。去年も端午に客の多きを、人はめでたしくと嬉しき顔をすれど、拙者は何分先の先が氣遣ひにてたまらぬゆゑ、始終稽古場稽古場にかゝみて、人の知らぬ處にてはひとり落涙したる程の事なりき。

*兄民治の子。

もしや、萬一、小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば、杉の家も危しく。父母様の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村にてすら山宅の事はよくは覺えて居るまじ。まして久阪などは猶以ての事。されば、拙者の氣遣ひに觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂は苦の種、福は禍の本」と申す事をとくと申聞かする方が肝要なり。なほまた一つ、拙者不幸ながら孝に當ることあり。兄弟のうち一人にてもふぎまのわるき

人あれば、あとの兄弟は自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受合ふゆゑ、兄弟中は拙者のかはりに父母様へ孝行してくるゝがよし。さすれば、つゞまるところ兄弟中皆よくなりて、はては父母様の御仕合せ、また子供が見習ひ候へば、子孫のためこれ程めてたき事はなきにあらずや。よくよく御勘辨候うて、小田村久阪なんどへもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに、

心學——神佛併せて
 通俗的に孝悌忠
 信の道を説く、
 周吉宗見事傳年向
 石田梅仙殿之を唱へ時
 天下に行はれり

永世——肉體は死するも
 も靈魂は永く生
 きて死せざること

心學本なりとをりく御見候へかし。心學本に、
切なる歎ありその神は其の政のしくかよわぬかり
 心配りのどかには行かぬとのまら
 のどけさよ、ねがひなき身の神まうで。
 神へ願ふよりは身に行ふがよろしく候。

十三日認

(俗簡棟輯)

三 死と永生

高山樗牛

死は生きとし生けるものゝ免るべからざる運命なり。それ唯免るべからざる運命なり、故に又避くべからざる問題なり。されど生ををしむ人はあれど

三 死と永生

考ふるは即ち人生の目的を考ふるなり。如何にして生くべきかの問題は、即ち如何にして死すべきかの問題なり。死を考ふるは死滅を考ふるにあらずして永生を考ふるなり。

されば吾等は生きざるべからず、永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり。されど吾らは死を超越して其の永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得んか。人生究竟の問題ここに集る。

世に神に禱りて永生を求むるものあり。佛に願ふ

ものは人生の倏忽を歎きて涅槃の寂寞を求む。されど形體を離れて魂魄なきを如何にすべき。其の墳墓を壮大にし、金を鏤め、石に刻して名の後世に傳はらんことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して、墓標獨り全きを得べしや否や。かくの如きは永生の道にあらざるなり。

まことの永生は名によりて生くるにあらずして事によりて生くるなり。儒教の存する所、今尙孔子あらざるはなく、佛寺の建つ所、到る處に釋迦あり、耶蘇

は十字架にかゝれりと雖も今尙基督教徒の命なり、
 楠公の史蹟に感激する者の胸には楠公其の人の生
 命あり、蒸氣機關の動く處にはワットの血液あり、電
 氣の線のかゝるところは即ちフランクリンが永生
 の地にあらずや。まことの永生は時と共に深さを
 加へ、人と共に廣さを加ふ。されば一人の精神は千
 萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々汨々
 として遂に世界を動かさずんば已まざるべし。十
 九世紀の文明はかくの如き幾多永生の結果に外な
 らざるなり。

一七三六—一七三九。

一七〇六—一七〇九。

諸子よ、諸子は曾て死を考へしことありや。其の年
 の弱きを以て早しとするなかれ。死を思はずして
 生きてたるは空しく生きてたるなり。其の死をして憾
 なからしめんと欲せずして獨り其の生の完からん
 を望むは、これ目的なくして道を歩むなり。死を思
 ふは即ち永生を思ふなり。而して最もよく此の間
 題を解釋したるものは哲人傑士なり。(樗牛全集)

四 浦島前曲

坪内逍遙

寄せ返る神代ながらの浪の音、塵の世遠き調かな。

*渤海之東有大壑焉其下無底名曰歸墟。

夫渤海の東幾億萬里に際涯も知らぬ壑あるを名づけて歸墟といふとかや。八紘九野の水盡し空に溢る、天河の流の限り注げども無増無減と唐土の至人がたとへ今こゝに見る目はるけき大海原。

北を望めば渺々と水や空なる沖つ浪煙る碧の蒼茫と霞むを見れば三つ五つ溶けて消えゆく片帆影。

それかあらぬか帆影にあらぬ沖の鷗のむらくはつと立つ水煙寄せては返る浪がしら。其の八重潮のをちかたや實にも不老の神人の棲むてふ三つの島根かも。
不老不死の仙人

蓬萊方丈瀛洲。

渺々—ひろく遠くからる

八重潮—八重に重なる潮

海をりふ

さて西岸は名にし負ふ夕日が浦に秋寂びて磯邊に寄するとゝる浪。岩に碎けて裂けて散る水の行くへの悠々と、且に洗ふ高麗の岸、夕陽も其處に夜の殿。錦繡の帳暮れ行く中空に、誰が釣舟の玻璃のともしび白々と、裾の紫色あせて又染めかはる空模様。あれ何時の間に一つ星雲の眞袖の綻見せて斑曇。變るは秋の空の癖しづ心なき風雲や。蟹の小舟のとりとに歸りを急ぐ櫓拍子に、船歌絡るかりがねの聲も亂れて、浦の門に岩波騒ぐ夕嵐すさまじかりける風情なり。
(新曲浦島)

開國の國是一國を用
さ外國と交

の方針
三月七日明治天皇陛下
の御折書文を拝す
物質的文明
船等の如き、有形上の
文明、精神的文明に對
する物
無用の長物
長は厄
物とりふこと、邪魔

五 現代の文學

佐々政一

維新の偉業正に成りて、開國の國是一たび定るや、世
間は西洋の物質的文明の輸入に急にして、和漢の學
術技藝を顧るに違あらざりき。況や美術文藝のこ
との如きは、全く無用の長物とせられて、幾多の國寶
は破棄せられ、無數の古典は廢紙となりぬ。此の間
にあつて纔かに文學の微光を存せしものは獨り新
聞紙なりき。

新聞紙の刊行は、これ亦西洋に學びしものにして、當

實用功利の論
實益を以て人生の目

時代思潮
その時代

追隨
おくれぬやうに

失意
得るべきの反對

合巻風の小説
幕末の時代

初は専ら政治論の機關たり、實用功利の論に非ざれ
ば、以て時代思潮に追隨するに足らずとなしたりき。
されど、普通教育の制度漸く國內に普くして、文學の
知識が中流以下の社會に擴張せらるゝと共に、新聞
紙の經營者も、亦此等の讀者に對して、その娛樂とな
るべき文藝の作物を供給せざるべからざるを知り
ぬ。かくて、幕末以降、久しく失意の地にありし戲作
者が、所謂續き物と稱する合巻風の小説を紙上に掲
げ初めしは、蓋し明治文學の萌芽なり。
從來、筆を政治論にのみ執りたりし人々も、此の種の

架空—想像の意

脚色—脚本の仕組

主張—いひはること
かぬこの持論をいふ

佳人之奇遇—東海散士
著

雪中梅—鐵腸未庵著

經國美談—矢野文雄著

宣傳—やまゝしき
傳へて世に行はるること

眞諦—併報して
如と同じ 眞髓と
いはんか如

文藝の人心に影響することの速かなるを認めて、或は英佛の政治小説を翻譯し、或は新に架空の脚色を立て、自家の主張を具體的に説明せんことを企てたり。佳人之奇遇雪中梅經國美談等は當時最も喧傳せられしものにして、慷慨激越の調時に青年者流を感奮興起せしむるものなきにあらざりしかど、その豪放粗大の文は未だ人情の機微に入らず、眞に文學の眞諦を得たるものといふに足らざりき。さもあれ、明治は既に十七八年を経たり、西洋の學術も技藝も稍咀嚼せられたり。世の先覺者はかの徒

腐心—苦心と同じ
評價—価値を評定すること

人生を描破す—人生の狀態を遺憾なくうつし出す

に物質の皮相外見にのみ腐心するの愚なるを悟りぬ。文藝美術の評價も日に漸く高からんとせり。この勢に乗じて、坪内逍遙等が文學論の出づるあり、硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり、在來の戲作者系の人々もこれに呼應して立てり。こゝに謂はゆる才筆家にもあらず、政論家にもあらず、熱誠なる態度を以て、直ちに人生を描破せんとする者は、將に踵ついでを接して出でんとせるなり。思ふに新文藝の勃興は、半ば西洋文藝によりて啓發せられたり。されども、他の一半は我が國の古文學

國粹保存論 時勢
いかに變遷しても我が國の國粹は保たれども保たざるは論

文壇 文人社会
泰斗 泰斗は支那最高級の北斗は家臣の才也にぞいれたる人をいふ
洛陽の紙價 洛陽は支那同漢時代の都の名、東之を比す
若手の世もてはやされ愛れ行きのふきこと

に淵源せるものなることを忘るべからず。蓋し維新以來萌し來れる西洋文明謳歌主義は此に其の極に達して、その反動たる國粹保存論は盛に唱道せられ、國語教育の獎勵、古文學の研究が、隆昌を極めしは、あたかもこの頃なりき。されば、新文藝の先達は、啻に西洋の文學のみならず、我が國の古文學に回顧し、或は中古の文學に私淑するあり、或は元祿文學に模倣するあり。我が文壇の泰斗として、新篇出づる毎に洛陽の紙價を貴からしめし、尾崎紅葉と幸田露伴とは、ともに西鶴を學びてその新文體を創めしもの

なりき。

情緒 喜怒哀樂の情
題材 題と材料
單調 變化なきこと
考證 ぶつくりぬきこと
觀念小説 一種の生歡 即ち觀念をとりて、社会を描寫せんとするもの
心理小説 小説中の人物の思想感情のつり行く有様を描寫せしもの
現世小説 現世の事象をその題材とするもの
人生の暗黒面

紅葉が艶麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が適勁の調は巧に男兒の意氣を描きぬ。されど、その題材は稍單調なりき。良久しうして世間は、その復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小説、冒險小説、俠客小説等の複雑なる脚色に喝采し、或は慘憺たる事件を敘したる所謂觀念小説、悲痛なる苦悶を抒べたる所謂心理小説を歓迎し、或は神怪不可思議なる妖怪談、或は淫靡不道德なる戀愛談と、幾度か流行は變遷しつゝ、その取材は日にく、人生の暗黒面

人生の暗黒面

に向つて進み去らんとせり。その間、或は光明小説といひ、家庭小説と號する道德的傾向ある作物の行はれしものなきに非ずと雖も、皆膚淺陳套、未だ人心の要求をみたし、人生に理想を與ふるものにあらずりき。

この時に方りて、東洋の一小島國は日清・日露の大役を経て、俄然として一等國の伴に伍せり。戰勝に酔ひし豪奢の餘弊と避り難き財政上の壓迫とは、我が國民が生活難の聲として青年の耳朶に響きぬ。顧れば、嘗ては文藝形式をのみ評論したりし批評家は、

此世の罪惡
海に入るも
家庭小説
物として
淺く
陳套
はしてふるさこ

漸く人生の研究に轉進し來りて、或は高山樗牛が美的生活論となり、或は綱島梁川が見神説となり、或は自然主義といひ、無理想無解決と呼び、在來の一切の教權を放下すべしとさへ説く者あるに至りぬ。既に生活難の聲に慄ける青年は、徒に多岐に惑ひて、唯煩悶するあるのみ。而して、所謂自然派の小説は、益々人生の暗黒面を誇張して、好みてかの悶々として燥焦し、狂奔し、疲憊困頓、蹠々跟々たる敗殘の青年を描きつゝ、以て人生の實相を盡したりとなせり。煩悶せる者が、暫くこゝに同情者を得たるが如く感ぜしは、

美的生活論
以上は
福生の生活
からず而して
定せしむる
教權
疲憊困頓
蹠々跟々
行々

混沌—物ごとの分り
分れるはらぬ

蓋し一時の迷想のみ。今や世間は漸く混沌たる思想界を出でて、更に高く、更に深き人生の眞意義を捉へんとして、倫理に、哲學に、宗教に、文藝に、秩序ある討究を重ねんとせり。思ふに、我が小説界が、崇高偉大なる理想に逢著して、更に向上の一路を發見すべきは、甚だ久しからざらんとするなり。
上來、主として小説の變遷を敘したり、最近の文壇に於て最も注目すべきはこの種の文藝なればなり。さもあれ、上古以來、常に流行し來りし抒情敘景の小詩形も、亦甚だ衰へたるには非ず。

抒情—自己の感情性
ものふること
叙景—自然の風景
ものふること

桂園の流—桂園は
香川景樹の號あり
この歌風をいふ
蒼虬—姓は成甲、金沢
の人、甚だ木の俳人
あり
梅室—姓は柳井、
金沢の人、幕末の俳
人あり
落合直文—萩の人、和
歌、仙石の人、和
歌、國文に長じ、
社を導いて新派
歌の鼓吹をつとめ
天明調—蕪村等の舞
臺の新能風あり

歌道には桂園の流を汲む者多く、俳道には蒼虬梅室の門派のみ獨り盛にして、和歌俳句といへば、専ら活社會と交渉なき閑人隱者の間に行はれしもの、明治初年の大勢なりき。かの國粹保存論、國文學の研究等盛なりし時に至りて、落合直文等とその門下生との手によりて、歌道はまづ、青年社會に入り來りぬ。かくて偏に風雅を生命とせる月花の天地を小なりとして、活社會の人生を歌はんとする傾向を生ぜり。俳道には、正岡子規出づるあり、天保の俗調を排して、清新なる天明調を復活せしめ、更に進みて淡々たる

鼓吹—鼓を打ち

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

笛を吹くこと

寫實の妙趣を鼓吹し、唯俳句のみならず、寫生文と稱する小品文の流行をも促しぬ。この派より出でて、筆を小説に著けたるものに、夏目漱石等あり。

この他、明治の新文藝としては別に新體詩あり。當初は故外山博士等が新體詩抄の調なりしが、その詞藻の稍乾燥なるに飽かざる者は、或は中古語を以て西歐の詩趣を傳へんとするあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らんとするあり。中頃、島崎藤村が溫雅優美の調、土井晚翠が縦横跌宕の風、最も青年の間に喜ばれたり。今や、新詩の格調日に新なりと雖

格調—字句の組立

と調子と

蕪雜—粗雑

秩序のなきこと

左軍—筆力の強

てよむかなきこと

明快—はつきりとして

氣持よきこと

筆致—筆のおもむき

も、或は險怪、或は蕪雜、未だ雄渾偉大にして、眞に國民の詩歌と稱するに足るものあらざるに似たり。更に、純文藝の範圍を出でて、専ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、かの漢文直譯風の文章が流行したりし日に於ても、既に福澤雪池、福池櫻痴、成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては、三宅雪嶺、坪内逍遙、森鷗外、高山樗牛、大町桂月等あり。その文各特色あり、長短ありと雖も、皆縦横自在にして、言はんとする所盡さざるはなし。現代の所謂普通文は、純文藝の著作よりも、寧ろ此等の人々の筆致に

負ふ所多きを受
くること

師範學校國文教科書 本科用卷五

80

負ふ所多きに似たり。

六 花の雲

花の雲鑿を上野と浅草と
本月の夜あつて早し最上川
杉枝に鳥のさうり秋の暮
羨海や佐渡のよきよ天の川
夏の花や坂を疵うて五右衛門
黄菊の葉その外の名はなまじ
那部嵐雪

平泉 陸奥 陸奥 陸奥
郡にあり 藤原清衡
真衡 香月 三代の御
守府のありし處

*元祿二年五月

七 平泉

松尾芭蕉

*十二日、平泉と心ざし、あねはの松緒だえの橋など聞

六 花の雲 七 平泉

四一

雉兔 雉や兔なれど
捕ふもの 雉兔

黄金花咲く 此は陸
奥國より 黄金を
奉りて 御代を
御代榮えん
とあづまな
るみちのく
山に黄金花
咲く。

き傳へて、人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ道、そこも
わかず、終に道ふみたがへて石巻といふ港に出づ。
「黄金花咲く。」とよみて奉りたる金華山海上に見わた
し、數百の廻船入江に
つどひ、人家地を争ひ
て、竈の煙立ちつゞき
たり。「思ひがけずか
かる處にも來れるか
や」と宿からんとすれど、更に宿かす人もなし。やう
やう貧しき小家に一夜をあかして、明くれば又知ら



松尾芭蕉

藤原清衡。
基衡。秀衡。

秀衡の築き
て平泉の鎮
護となせる
山。

ぬ道迷ひゆく。袖の渡尾駁の牧眞野の萱原などよ
そめに見て、遙かなる隄を行く。心細き長沼にそら
て戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。その間
二十餘里ほどと覺ゆ。

ぬ道迷ひゆく

そら

三代の
榮耀一
炊の夢

にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が墟は
田野になりて金鷄山のみ形を遺す。まづ高館にの
ぼれば、北上川南部より流る、大河なり。衣川は和

南部地方、
中國盛

國破山河在、
城春草木深。

泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。
泰衡等が舊跡は衣が關を隔て、南部口をさしかた
め、夷を防ぐと見えたり。さて、義臣すぐつてこの
城に籠り、功名一時のくさむらとなる。國破れて山
河あり、城春にして草青みたり。と、笠うち敷きて時の
移るまで涙を落しぬ。

夏草や、つはものどもが夢の跡。

卯の花に兼房見ゆる白髪かな。 曾 良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像
を遣し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。

義經の郎黨
増尾七郎、年
六十餘、白髪
を被り奮闘
して死す。

二堂——經堂

七寶散りうせて、珠の扉、風に破れ、黄金の柱、霜雪に朽
ちて既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新にかこ
ひ、藁を覆うて風雨を凌ぎ、姑く千歳の記念となれり。
さみだれの降りのこしてや光堂。(奥の細道)

八 百蟲譜

横井也 有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきもの、かぎりなる
べし。それも啼く音の愛なれば、籠に苦しむ身を
らぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこ
のものには託しけめ。

さてこそ——
蝶は白の身なればこ
そ、莊周が夢も外の
ものしめせり、ことごと
し、
ねるちり、
莊周——宋の人なり

歌よみの部
 古池にとんで
 芭蕉の物言
 唐土は東京
 深川の池あり
 蛙の古池に
 水の古池あり
 蛙の古池あり
 を聞きて大
 げの聲底せり
 とよかあり古池や

やがて死ぬけしきは見えぬ
 蝉は五月晴に聞きたる程がよきなり
 やりか
 翁
 芭蕉翁の
 竹

花に鳴く鶯
 水に住む蛙
 の聲を聞け
 ば生きとし
 生けるもの
 いづれか歌
 をよまざり
 ける。
 五月晴の晴れぬ空
 の見えぬ
 やがて死ぬけしきは見えぬ
 蝉の聲
 えず、蟬の
 聲。

蛙は古今の序（三）に書かれてより、歌よみの部に思はれ
 たるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆ
 るはよし。古池にとんで翁の目覺したれば、このも
 のゝこと更にも誇りがたし。
 蟬はたゞ五月晴に聞きたる程がよきなり。や
 や日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。
 されば、初蝶とも初蛙ともいふことを聞かざ、このも
 のばかり初蟬といはるゝこそ大きな手柄なれ。
 やがて死ぬけしきは見えぬ。と、このものゝ上は翁の
 一句に盡きたりといふべし。

螢は類ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水
 に飛びかひ草にすたく。五月の闇は、唯このものゝ
 爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕へら
 れて油
 火の代
 りにせ

ヒルカカ
 螢の心
 くらげのふ
 くらげ
 井非也筆

螢火と詠ませざる
 ほたるといふ草の中
 はほたる、即ち火とつふ
 語のまじり、ほたるは
 り、

られたるは、このものゝ本意にはあらざるべし。歌
 に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧
 にはその眞似すべからず。
 茅蚰は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過

後生—極樂往生のこと

師範學校國文教科書本科用卷五

五

卯月—陰曆四月の事
卯月の味は
端居珍しき
居は後側の端
ル坐り居ること、ま
夏涼みのはりめ
れは、あつり—と成り
あり
長月—陰曆五月の事
先、夜長月の中夜

*嵇康。晋の
阮籍。晉の
山濤。竹林中
向秀。竹林中
劉伶。も
阮咸。
王戎。

て、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松
蟲の類なるべし。
蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃端居珍しき
夕べ始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ力
なく残りたるは、淋しき方もあり。蚊帳つりたる家
のさま、蚊やりたく里の煙など、且は風雅の道具とも
なれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の
夜話にはいかに團扇のひまなかりけん。 (鶉衣)

九 知足菴の記

村田 春海

あはれ世の
世のま—ならぬ物
如何に嘆きても
いなきもの、れとなり
己がし—いめいれ
尾上—尾の上のま
巖

*鶴巢、樹、
不_レ過_二一_レ枝_一。
偃鼠飲_レ河、
不_レ過_二滿腹_一。
神伊の語

萱が軒
の屋根に
を離れて
せり

あはれ世のならばしこそはかなき物はあなれ。高
き、賤しき、品いと異なりといへども、己がしし心行く
ばかりなるは稀にて、唯足らはぬ事のみぞ多かりけ
る。花を思ふとては梢の嵐を恨み、月をめづるとて
は尾上の雲をいとふためし誰かは逃るべき。*林に
宿るさゝぎは、僅かなる小枝の影をのみたのみ、流れ
に水求むる鼠は、唯腹ふくるゝに過ぎず。ところ古人
もいひつれ。かゝることわりをだに分たば、限ある
此の世に、限なき事を思ふべきかは。こゝに中村の
ぬしなん能く塵の世のけがしきを逃れて、萱が軒、松

九 知足菴の記

五

心の月——心の清を
丹にたとひたり

あま——あま——
心身を離れ明後山
の如く心をすまふこと
關伽——轉法輪供
ゆる水、
樹尾の昔を忍ぶ——明
惠大始末をこころ
樹を格格す爾来
茶を塔村あり、こ
は、茶道に心を
あるをりふ
この世に衣あひさす
おのかがり満足を打ち
れ人の家来をすま
ぬこと、
空蟬の世——空蟬の
は、槐詞、現在の世を
いふこは、村ぬしの
世を遺れぬ

の樞に心の月をすましめ、花を摘む夕、關伽をくむ曉、
御佛につかふる暇ある時は、冰をくだき雪を煮て、梅
尾の昔を忍ぶめる業にしも心をなん慰めける。こ
れやこの世に求むべきすぢをも忘れ、又人を羨むべ
きふしをも思はで、己が心から事足る業にしもあれ
ば、前の世の業をすまふ彼のいにしへ人のいひけんことわりにこそかな
はめ。いてや空蟬の世の限なき求ある際とは、日を
並べてあげつらふべくもあらざりけり。うべなう
べな、此の住家をしも足ること知るとは名づけしこ
と。
(翠後集)

その年——ある年
こは文治二年
源頼朝。
蘆鷗のあひ
鶴のまみほり行ふ
あまきまみほり行ふ

御階——神前のお
かりの人

一〇 西行法師

上田 秋成

文治その年の八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮
居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかうまつる
人々、御前おひ、御あとべつはらのかうまつれる、渚に遊ぶ蘆
鶴のあゆみして、疾からず、遅からず、つらを亂さずね
り出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、かしこみたい
まつれる人数多あるに、お前拂ひしてあなとだにい
はせず、世にいかめしく貴き御有様なり。
かへりまをしして御手輿に召させ給ふほど、御階の

忌垣―神社のあかりの

師範學校國文教科書本科用卷五

五

なほ人―
雲水に―
諸國を遠征するよ
り、行脚僧のこと
をいふ。

賢き人得たるためし
西伯將^{*}獵、
ト之曰、非
龍非^{*}彫、
非^{*}熊、非^{*}羆、
熊、所獲^{*}羆
王之輔。果
遇^{*}呂尙於
渭水之陽。

おほとなふら
大殿曲のま
あま
座席

忌垣のもとに畏りをる法師のあなるが、見上げ奉る
面つき、なほ人ならずと思しけん、御輿ぞひの若侍し
て問はせ給ふ。ゆくりなきに驚きたる様して、雲水
にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申す。とい
ふ。聞召されて、さればこそ聞知りたれ。穴熊のた
けき獲物の類ならで、賢き人得たるためしに、誘ひか
へらん。わがあとに連れて來れ。とて召連れさせ給
へり。
御館に入らせられ、御装束改めさせ給へば、やがてお
ほとなぶらあまた照しか、やかせ給ひて、おまし近

簀子―
箒子の後、後には板
と板との間をすわ
張りたるをいふ。
藐姑射の山の御宮仕
處、さか仙洞即ち
院の御所をいふ。
みこととあり、こ
は西行かあひせさる
以前、佐藤藤原義清と
稱して鳥羽上皇に仕現
御のかまをいふ。
三十文字あまりのまなび
三十文字あまりのまなび、和
歌の穂をいふ。

き所の一閒なる簀子に召されたり。大將殿見おこ
せ給ひて、昔藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはか
なきものに思ひなして、身は黒くやつれたれど、月花
のなげきの譽は、物の心をなき東人さへ聞知りたるぞ。
弓取る人の、もとの心の猛きには、よむ歌も直くあか
らさまと聞くはまことか。武士のあらくしき心
には詠みうつし得まじきものに、宮人達は沙汰し給
へりとや。軍に出立ちて、笛鼓の音馬のいな、きは
物とも思はぬを、この三十文字あまりのまなびには
心の後るゝはいかに。こはかしこき御心にも思し

一〇 西行法師

五

漢高祖。大風起兮雲飛揚。
魏曹操。月明星稀烏鵲南飛。

すこよかー 秋の心の
まじくー 強きこ
益荒雄心ー 剛健
あてー 上品
なよびかー やさしく
うしろかー 秋みづか

惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢とらして、軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛くすくよかに、調もいと高しとこそうち聞き侍れ。いてや歌詠まんとては、益荒雄心をとり隠し、あてになよびかに詠みうつすべくすること、この道のいみじき煩なれ。君が御心のとくたけきまゝにうちいて給はんには、今の人誰かは立ちあへ奉らん。三尺の劔を執りて、「大風起り、雲飛揚す。」とうたひ、槊をよこたへて、「烏鵲南に」と詠ぜし君達は、鞍の上にて、文に遊ばせ給ふならずや。」と云ふ。

秀郷ー 田原 藤太
藤原秀郷のこころ
平将門の叛こや平貞盛と協力しつゝを滅す。

「人々、あれ聞き給へ。世は捨てたれどたのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓矢の上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にてもをしへ承るべし。」こは益恐ある御問はせなり。つは者の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦法師にさへ物問はせ給ふことのかたじけなさよ。向ひ奉りては、をこがましく家の傳なりなど、聞え奉るべうも覺えはべらず。ましてありがたき大宮仕をいなみ

竈を滅し、衛の吳起。
 齊の孫臏。
 齊の孫臏の
 孫臏を討つ。次日は
 五萬の軍をその次日に
 は三萬の軍を討つ。つら
 くは魏將 龐涓之を

奉り、親の思つくしみをさへあだなるものにして、年
 纔かに二十五にて家を出てたるいたづら者の、弦ひ
 き一つだに心に留めしことも侍らず。たゞ一言の
 忘れがたきは、賞を重くし、罰を軽くせよ。」といひしと
 「任ずる者を辱むれば危し。」といひしとのありがたさ
 よ。士卒の疝疝を病めるを吭ひしは、人の心をよく買
 ひなすと雖も、誠の情よりとも覺え侍らず。竈を滅
 じて、人を危きに落とし入るゝは、將帥のさかしきにて、
 國を治め、天の下をしるべき君の御心にあらず。軍
 を出し給へる事の、怪しきまでかしこくませるを、餘

聞き、齊の軍を討つ。
 一、歩軍を棄て、輕
 銳を率ゐるを、追ひ
 敵の術中、陥し、白
 頭、つれづれ、孫臏
 の名天下に馳る。
 口とく、口とく能辨
 ちよと、
 まれ人、一、客人、西行を
 せよ。
 し、猿、一、改策のあら
 ぬ男を、猿、猿、猿、猿
 へたり。

所ながら見聞き奉るには、このかたの御問許させ給
 へ。」とて、額を板敷に摺りつけて申す。
 君笑み誇らせ給ひ、口とく心さとき法師なり。今宵
 は月見る夜ぞ。物語今は果してん。人々と土器と
 りはやし、曉かけて遊ばん。まれ人は酒飲まざるべ
 し。し、猿の中に立ちまじりて、歌よめといふとも
 よむまじ。たゞわが前に遊べ。風冷かなるにも、飽
 かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は、暖かにも
 こそ。この火取、法師に參らせよ。」とて、白銀もてつく
 りたる猫のかたちしたるを、取傳へて、君より賜ふと

て、前に置きたり。「しゝ、猿は尙心たけし。鼠をだに
 えとらぬ瘦法師が爲には、似つかはしき御賜物ぞ。」と
 て、三度おしいたゞきぬ。
 あした御暇たまはりて立ちいづるに、御館の人やど
 りに、誰が殿のわらはべならん、くゝり袴の裾、朝露に
 濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、「これ取らせん。
 火埋みて手足煖めよ。」とて、かのきら／＼しき物を與
 へて、かへり見もせず立ち去りぬ。童が主なる殿、い
 とあやし。大將殿の法師に賜はせしを、いかで童に
 得させけん。とて、まづ急ぎて聞え奉る。申し上り君うちゑみ

くゝり袴袴の一種
 して、身をくゝりぬ
 るもの、
 けはつけはつしつぱりぬ
 ること。

給ひ、かのえせ法師、あなづらはしくをさなげなる物
 くれしとて、腹だたしくや思ひけん、わが門の前に捨
 て行きつるよ。法師とて、男魂なくば修行もえせぬ
 なるべし。されど家を出で、なほ才に誇りて、野山に
 まじり、歌詠みてのみあるは、世捨人の捨てらるべき
 あさましさぞかし。一度けがれし物、その童に取ら
 せよ。とて、とりおろさせ給ひぬ。下し賜はる
 西行、後にこのことを人に語りていふ、右府はまことに
 にねじけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針の
 おはするぞ。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、

えせ法師えせは
 似ておろすもの、おろ
 朝のいやあそひ
 る袴
 あなづらはしくあなづら
 ありつるは、あなづら
 と同じく、あなづら
 子供、あなづら
 か如し。

口に蜜し給へど、心には針の
 口に蜜し給へど、心には針の
 曹孟徳の智略
 魏の事、
 のこと、
 はそのゆきなり。

漢*の高祖。

冥福——死後の幸福
 神の御裔——天照大神の子孫
 心なき身に
 *もあはれは
 知られけり
 鳴立つ澤の
 秋の夕暮。
 うちのそむし
 悲しみなし
 つむことお
 ぼさす候
 のは佳きこと

兵戈の動く——兵は
 武器あり
 勳を
 庶民——ちりくの民
 般人民
 四民——士農工商

戯曲——演劇の脚本
 墨守——途々そればかり
 のふと城を字りて故
 事りあか
 固陋——頑固して見
 識のせまきこと
 傾倒——専ら心をか
 ちむこと

天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふものを、生れながら得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、この後やうく衰へさせ給はん世の姿なるは、とて、涙とゞめ難くして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞き傳へては、秋の夕暮ならずもうちひそみぬべし。 (籐篋冊子)

一一 江戸時代の文學 藤岡作太郎

江戸幕府の世は、泰平打續きて、殆ど兵戈の動くを見ず、文化の進歩前古むかしに比なし。獨りこれに對比すべ

き平安朝の文化も、貴族が占むるのみにして、庶民は與らざりしが、この時代はこれに異なり。學問・藝術上下に弘通して、四民ともにその徳を享け、文學の滋味も普く世に味はるゝに至れり。されど幕府の施設漸く成るに従ひて、戦國の世に壞れかゝりし階級の制も更に立ち、従うて文學にも貴賤の別なきを得ず。上流の人は詩歌を詠じ、下流は俳諧を遊び、彼は學問にわたるものを喜び、此は戯曲・小説の類を愛し、彼は古文を墨守して固陋に流れ、此は新作に傾倒して卑俗に陥る。學識あるものは新

戲作——たはちれの作

思想界の現象——精神
神界に起れる事柄

檀那——佛法を施す
も人、即ち信徒を

安逸——そのまをたつとめ
徒らに日を暮らすこと
勃然——はかに起る貌

興の文學を卑しむ、新興の文學に就くものはみづから低うして、高尚なる趣味を解せず。かくて戯曲小説の如きは、戯作を以て目せられて、正當なる文學上の地位を得ること能はざりき。
この時代に著しき思想界の現象は、儒教が佛教に代りて勢力を得たることなり。佛教の上下を通じて普く行はれたることは變らずといへども、寺院には領地あり、檀那ありて、富有なるがまゝに、僧侶は漸く安逸に馴れて、布教を怠れり。この時、儒教は勃然として興り、力めて修身治國平天下の道を唱へしかば、

修身治國平天下の道——
儒道をいふ、天子たるもの一身を治めて徳を遠くに及ばしめて、天下國家を平らかにするが儒道の極致なり

感化——感化してその方
にうつらふこと
國學——皇國の大道
を研究する、此の道

世人を導いて文化の域に進ましむるもの、今は佛にあらずして儒なり。されど從來養ひ得たる佛教の感化もまた侮るべからず。國學の新に起りて、わが國本來の道を明めんとしたることも、また注意すべし。
殊にこの時代の人心を支配したるは武士道なり。武士道は日本固有の廉潔尚武の精神に、人倫五常の別を明らかにする儒教の意と、生死を離れ、進んで惑はざる佛教の旨とを折衷し、之を古來の戦亂に鍛へて成りたるものにして、この時代に至りて最も光彩

造次 僅かのあひ
朴直 質朴にして

浮華 空しく
義理 人のつとま
逆

佚書 教味
馬 上得之
陸生 曰居
寧可 以下馬
上治之乎

陸生時々前
說誦詩書
高帝罵之
曰酒公居
馬上得之
安事詩書
陸生曰居
馬上得之
寧可以下馬
上治之乎

を發揮し、武士はこれを以て造次にも怠るべからざる大道とす。その朴直を守りて浮華を斥け、感情を卑しみて義理を重んじ、婦人の勢力を無視するは、著しく平安朝に相違せる要點にして、また武事を偏重するより、時に殺伐に流るゝ弊なきにもあらざりき。今、江戸時代の文學を左に槩説せん。

一、漢學 徳川家康馬上に天下を得たりと雖も、馬上に之を治むべからざるを知り、佚書を蒐集し、古書を刊行し、漢儒を重用し、以て文學復興の機運を開けり。將軍綱吉特に漢學を好み、儒者を禮せしかば、學者輩

朱學 宋の朱熹の
學 程朱の學
六經 六つの
經 易經、書經、詩經、春秋、禮記、春秋
樂經はそのついで
古文辭學 漢以前
の古文辭を研究し、
の古意を研究し、
の古意を研究し、
の古意を研究し、

出し、文華一時に煥發す。所謂元祿時代是なり。木下順庵は京の人、のち江戸に出づ。その學博通不偏を旨とし、門下に雨森芳洲、新井白石、室鳩巢等、著名の士多し。伊藤仁齋京に起り、朱學は孔孟の古意にあらずとして、別に古學を立て、その子東涯博覽にしてよく父の學を祖述す。荻生徂徠江戸にあり、また朱學を駁し、六經を重んじて古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙す。その門人のうち、太宰春臺は經義に通じ、服部南郭は詩文をよくせり。筑前の士貝原益軒も當時の碩學なり。その書を著すや、槩ね平易

にして實益あらんことを期し、普通文に記して丁寧深切なり。江戸の新井白石は將軍家宣及び家繼に仕へて政務に參與す。學博く、識高く、わが國の歴史制度、語學等に關して有益の著多く、行文犀利にして透徹せざる所なし。眞に古今を通じて稀なる文豪なり。

後、文化・文政の頃に至りて、太田錦城等また折衷學を唱へ、黨を分ちて相爭ふ。奥州白河の城主松平定信之を患ひ、林家の私學を幕府の有として昌平校と稱し、林述齋をして之を統べ、柴野栗山等をして之を助

行文——文をやること即ち文を作ること、犀利——犀は堅有り、文勢鋭く少し、よしみありことし。

けしむ。また朱學を奉ぜざるものは官職に就くことを得ざらしめたり。之を異學の禁といふ。此の時にあたり、關西には頼山陽の如き文豪あり、天與の詩才を驅つて日本外史の大作を著し、盛に尊王愛國の主義を鼓吹したり。

異の學——朱學を官學として他の學は風を異學とせしむ。

二、國學 元祿時代に於て和漢の文學に大功ありしを水戸侯光圀とす。彰考館を開きて大日本史を撰す。その學の重んずる所、大義名分を正すにありき。光圀また古典の研究に志あり。下河邊長流に託して萬葉集を註釋せしむ。長流業を終へずして歿し、

大義名分——人として行はねばならぬ義理すむべきこと、君臣の名分をいふ。

造詣一造も皆も皆も
其の造詣も皆も皆も
いなりふかきなり

釋契沖その業を繼ぐ。契沖國文を好み、造詣至りて深く、識見世に絶す。その著述少からず。享保の頃、京に荷田春滿あり。國史律令に通じ、古意を明らむるを以て己が任とす。いはゆる國學とて、古典を究めて國體のある所を學ぶは、この人に起れるなり。幕末勤王攘夷の説の沸騰せるは、水戸の學と國學との感化與りて力ありき。賀茂眞淵は遠江の人、京に出てて春滿に學び、學成りて後、江戸に來りて講説し、田安宗武に仕へて厚遇せらる。その學は春滿に繼いでわが國固有の道を明

らかにするにあり。謂へらく、昔、儒佛の教の傳はりしより古道はこれが爲に廢れぬ。故に古道を明らかにせむとせば外國の影響なくして、人意の自然に出でたる古書を學ばざるべからず。その古書は萬葉集最も善し。と。よりて、深くこの書を究む。識見甚だ高しと雖も、詩文の才は寧ろ學問に勝れり。門下に高材の士多くして、これより國學の勢、天下を席卷するに至れり。眞淵の門人多きが中に、伊勢の本居宣長、江戸の加藤千蔭、村田春海等、最も名あり。宣長の學は一に古道

を明らむるにあり。古道を知るには古事記最も貴ぶべしとして、その註釋に従事し、三十五年を経て業成る。即ち古事記傳にして、以てその深遠なる學と穩健なる見とを見るべく、實に契沖の萬葉代匠記とあはせて江戸時代國文學界の二大作なり。宣長なほ多くの著述あり。門流甚だ盛なりしが、歿後の弟子、伴信友、平田篤胤最も著る。篤胤は出羽の人。その意宣長より一步を進めて、古道を以て一の宗教とし、之を弘布して儒佛の教を斥けんとするにあり。勤王攘夷の説はこれらの論によりて、益、刺戟せられ

刺戟——はげむること

たり。當時、京の文壇は寂寥たりしかども、香川景樹の歌道を一新したる功は特筆大書せざるべからず。景樹の一派を桂園流といひ、大いに世に行はれたり。三、俳句 俳句は元祿のころ伊賀の人松尾桃青、芭蕉翁京に出でて北村季吟に學び、後江戸に來りて正風を起し、また東西に周遊して吟腸を養ひ、その風を擴む。詠ずる所人事よりも自然に多く、幽玄清淡にして廣く雅俗にわたる。四方翁然として靡き、俳句これより遍く都鄙に行はる。門人に俊秀の士多し。その後風調漸く卑俗に流れしかば、天明の頃、これを

吟腸——特筆と云ふこと
俳句を詠む心懐
幽玄清淡——趣味のあ
く、容易に知りかたし
俗を離れしやしかり
翁然——合の貌

革新
新しきことをあらわす

淡雅輕妙
あつさり
とて高き、筆が
のの軽く、面白
いこと

才藻
はたうさの
る文のあや

慨して革新を唱ふるもの東西に起れるが中に、京の谷口蕪村その最たり。蕪村好んで自然の景物を詠じ、漢詩の趣を傳へ、またよく歴史的事實を材料とす。桃青と相並んで斯道の二聖とすべし。横井也有は尾張侯の臣、殊に俳文をよくして、淡雅輕妙なり。四、戲曲 戲曲は謠曲等より出で、江戸時代に至りて大いに發達せり。元祿の頃、近松門左衛門あり、京に住み、のち大阪に移り、盛に戲曲を作る。寫す所、人情の祕奥を穿ち、才藻湧くが如く、筆つみ行筆の自在なること行雲流水に似たり。ついて竹田出雲あり、文才は門

文藻絢爛
文のあや
先りあり、うよはし
きこと

左衛門に及ばずと雖も、趣向の變化に富めることは卻つて勝り、今日世に行はるゝはその作に多し。五、小説 小説は最初京阪に榮えしかども、文化、文政の頃に至り、江戸に作者輩出せり。中にも曲亭馬琴は學問該博にして文藻絢爛なり。椿説弓張月里見八犬傳等その作の人口に膾炙するもの多く、一篇出づる毎に、世人争うてこれを求む。その趣、一に儒教によりて勸善懲惡を旨とせり。(新日本文學史教科書に據る)

一一 雲の影

幸田露伴

誰でも一度遭遇した事の有る人は能く知つて居る事である。小高い山から廣い野を見て居たり、又小高い斷岸カキの上から海面を見て居たりすると、能くはつきりとわかるが、大きな雲の影が、丁度青い天を其の雲の行くのと同様に、其の野の中や海の面を這ひ歩いて行くことがある。天氣のさまで悪くないをりでも、さういふ時は即ち日が當つたり陰つたりするので、俗に其の事を「日がへりがする」といふ。其の日がへりがするのは何でも無い、たゞ雲の影がさせるに過ぎないのだから、大きな雲にせよ、細長い

引窓
窓の
内
外
の
影
の
移
り
方
を
考
へ
て
見
よ

雲にせよ、其の雲さへ過ぎてしまへば日は相變らず照るのである。いや此の地は其の雲の影の中に入つて陰つて居るにしても、一寸でも其の雲をはづれて居るところでは鮮かに日が當つて居るのである。だから其の暗い陰の中に入つて居るところは、野や海の全體から云へば眞の一小部分に過ぎぬ。然し眼を遮るもの、無い野や海を見て居る場合で無くて、家ごみの市中の、天が引窓から四角に見えたり、路次の上に細長く見えたりするやうな處に居ると、日がへりをして我が居る處が曇つた時に、それを

一小部分と考へることは出来難いもので、全體が曇つて來たのだと信じてしまふ。鄰家の人も、向ひの家の人も、皆一緒に同じ影の中に這入つてしまふので、皆一緒に其の雲が與へる同じ感想に支配されてしまつて、甲乙丙丁、六兵衛も七兵衛も同じ薄暗い暗さを味ふのである。三十分か四十分の後にはどういふやうになるといふ事などは全然想像しないで、たゞ目前の頭上だけの暗さを全體の天氣が斯うても有るかのやうに、知らず識らず認定してしまひがちなものである。かういふ影の一部分から云へば

間違では無いやうだが、大局から云へば間違つて居ることをば、古くから「同分妄見」と云つて居る。

宗教の歴史を見ても、政治の歴史を見ても、經濟の歴史を見ても、さて何の歴史を見ても、同分の妄見が正見らしく威張つて居る事は稀では無い。狐が尊ばれて居る地がある、犬神が畏れられて居る地がある、偶像が信ぜられて居た時がある、經典は批評すべきもので無いとせられて居た時がある。いづれも皆其の場、其の時では事實らしく道理らしく一般の人から認められて居た同分の妄見である。

大神—神經、神の種は
て四國中國の神は行
はる、
偶像—木は、金は、銅
は、
經典—史記、史記、
史記、史記、
史記、史記、
史記、史記、

文學上にも矢張りさういふ事實のあつた事がある。時代が違つたり、場所が違つたりするところの者から見れば、一苦笑にも値せぬくだらない事にも、其の時代の者、其の境界の者は泣いたり笑つたりして大騒をやつて居た事がある。即ち所謂「時代の塵埃」を擧げて騒いで居た事がある。たとへば、和歌で云へば、定家以後徳川氏に至つても、猶精神の無い形式主義の行はれて居た間の如き、俳句で云へば、談林風の行はれた一時などがそれである。足利氏時代の和歌を異時代の今から見れば、何がおもしろくてあ

形多き歌
和歌の海を渡る
けりよりの外はあつる
ことを許さぬ多きか
談林風
西山宗因之を以て

やうなものを作つて居たらうとは誰の胸にも浮ぶことであるけれども、其の時代は其の時代で、いろいろと骨も折つたり、賞讃もしたりして互に勵みあつて居たのであらう。併し時代が離れ隔つて見ると、我々は其の時代を蔽つて居た雲の下には居ぬから一向に感心せず、合點あてまもしない。そして直ちに其の時代の人が形式主義の同分妄見に落在して居たのを認めて、あゝ彼の時代にだつて才のある人が無かつたでは無からうが、惜しい事に時代を蔽つて居た偏狭な形式主義の氷の爲に、眞の歌の若草は萌えず

に終つたのであらうか。と思はずには居られない。
漢詩も明の末の險仄自ら奇なりとした頃などは、ど
うも慥かに變な雲の影が一時を蔽つて居たのであ
らう。

和歌漢詩は姑く措いて、手近く例を俳句に取つて見
よう。芭蕉以前、いや芭蕉がまだ正見の眼を見開か
なかつた前の頃の情態といふものは、其の當時の暗
雲の下に居た人同志に言はせたならば理窟も有つ
たので有らうが、時代が距つて居る今日の我等から
見れば、實に變なものであつた。たとへば

正見の眼を
に放ける情

千代を經る天のてんつる露酒

酒は天の露のなまなま
り、露をいふより天を
かけ、天より降るを
千代を經るにかけを

山吹の露
山吹の花

口西路のかけはる風情か
其菜の花のかこちを
似たりとや

技巧——わざのなぐみなり
こと

千代を經る天のてんつる露酒。

山吹の露菜の花の啣ち顔なるや。

氷筋の如しかんてんのかんは寒いとよむ。

といふが如き句は、今の者が卒然として之れに臨め
ば、句としては受取らぬ程のものである。其の意味
が第一に何であるかも不明である、其の趣味がまた
何處に在るのだから不可得である、其の技巧がまた何
處に在るか合點が行かぬ。詰り食物で無いものを
口に入れた時にどう味つて何といつて評すべきか
を知らぬが如くである。しかし其の當時の人、即ち

欺かぬ感じ
から感い
のつて

風潮
轉りて
時勢
たりの
意に
同

其の様な句を作つた人や、其の様な句を、成程これは面白い、をかしいなどと受取つた人にして見れば、まゝるきり意味も分らぬ、趣味も感じられぬ、技巧も認められぬといふものでは無く、必ず欺かぬ感じや、少からぬ興があつて、そして作る人は作り、聞く人は聞いて居たに違ひ無い。でもこれが一人か二人で此の様な句を呻つて居たならば、如何に昔時にせよ狂人沙汰に扱はれるであらうが、そこが彼の「通り雲」の影を一同で浴びれば、一同が同じ感じを持つ道理で、時代の風潮でそんな事が流行れば、誰も彼も矢張、天の

本領
の領地
こは位地
又は立揚
の意
の意
の意

西山宗因
田代松意
菅谷高政
井原西鶴
田中常規
山口素堂
杉山杉風

てんつるといつた風の事を悦んで真似る爲に、狂人らしく見えぬどころでは無い、卻つて面白がりきつて、俳句は應に是の如くに作るべし。位に思つて居たに違ひない。だから宗因門下の松意や高政や西鶴や常矩や何ぞはいふに及ばず、芭蕉であれ、素堂であれ、杉風であれ、皆一時は同じ「通り雲」の影の下に立つたので、一緒になつて變な真似をして居た。されど、これも一時で、數年の後には談林派もやがて振はなくなつた。で西鶴は小説の方面に本領を拵へ、芭蕉は一度は談林調の雲の下に居たものゝ、忽ち

山崎宗鑑
荒木田守武

山崎宗鑑
荒木田守武
初めは人なりし俳句
は人生の無常を悟
りて世を休むる
を得
荒木田守武
伊勢
俳句の祖

にして其の非を悟つて、自然に基づく蕉風の俳句を起し、宗鑑守武以來諧謔の一口業たりし俳句を詩歌と並列して愧ぢざる一體の短詩として、徳川期文學史上に建立するの大功を成した。芭蕉門の龍象も其の年齢に於て芭蕉と遠からざるものは、何れも大抵一度は談林調を試みたものであつたが、後にはこれを棄て、芭蕉の所爲に倣つた。是實に彼等をして不朽の名を成さしめた所以である。然らずんば談林の末輩同様、矢張「時代の塵埃」として後世からは鼻の先であしらはれるに過ぎなかつたらう。

久雨漸く霽れんとする時や、晴天漸く雨ふらんとする時などは、得て「日がへり」のするものである。時代の潮流が漸く變る時には、動もすれば後から見ても解釋の出來ぬやうな變なものが行はるゝ事がある。詩でも歌でも他の美術でもさうである。併し雲はやがて去る。片雲の與ふる影の下が世界の全體ではない。雲來つて萬山動き、雲去つて山一色である。

(太陽)

一三 不二の神山その一 遅塚麗水

函嶺—箱籠山を支那
 函嶺—晴れたる山
 晴巒—晴れたる山
 雲漢—雲はわたり
 五朵—物の名
 紫嵐—紫の嵐
 平旦—夜明け
 攀躋—登山
 東道—道

函嶺より望めば、不二の神山は晴巒雨峯を壓して、高く雲漢を抜く。上峯は五朵を成せり。上、青天と連なり、下、白雲と接す。車の行くに随ひて、四朵となり、三朵となり、既にしてまた四朵となる。雪は日を得て雲母の色をなし、陰は紫嵐を凝らせり。御殿場に到りて客舎に就く。日、亭午にちかし。主人曰く、登嶽の客は皆平旦にこの處を發す。貴客は京人なれば、攀躋の具に乏しからん。合力を僦ひ給へ」と。合力とは綿衣草鞋食糧を負うて東道をなすものなり。余應ぜず。直ちに飯を命ず。飯終る。馬を喚ぶ。

馬頭—馬の頭
 賣茶—茶を売る
 馬夫—馬を飼ふ人
 胡蝶—蝶
 急阪—急な坂
 馬頭—馬の頭
 賣茶—茶を売る

馬來る。まづ草鞋數隻を買ひ來らしめ、これを腰間に帶びて、騎して發す。仰ぎ見れば、嶽影忽ち亡く、風色甚だ悪し。馬夫、面を仰いで曰く、雨將に來らんとす。然れども山は應に牢晴なるべし」と。雲の徂徠すること頻りなり。中に隱々として嶽影のさながら斷霞のごとく紅なるを見る。一路、燕麥香し。馬鈴の音を趁うて胡蝶亂れ飛び、夢の神をそのやさしき翅に載せて我が懷に送る。既にして大いに嘶く聲あり。夢覺むれば、急阪馬頭より起る。馬夫曰く、回馬阪なり」と。馬を舍つ。賣茶

透進 透進 透進
金剛杖 金剛杖 金剛杖
長草 長草 長草
六稜角 六稜角 六稜角

の翁に乞うて茶を喫し、憩ふこと少時。これより路は透進として矮樹長草の間を通ず。路窮りて、一宇あり。金剛杖を賣る。これを購ふ。長さ五尺にして、六稜角をなす。既に登れば、草や樹や漸く短く、漸く少し。初めには人を没し、次には帽に及び、次には肩に至り、而して袖而して行滕、歩に従ひて漸次に短小となる。遙かに望めば草色煙のごとく、迢々として雲に入る。近づけば、卻つて無し。唯蓬の花の處々に散點せるを見るのみ。遂に一合目に至る。路は爛沙の上を走る。

珊 珊 珊

山骨 山骨 山骨
相 相 相
隆然 隆然 隆然
三四弓 三四弓 三四弓

顧みれば近山遙水、歴々見るべし。身は既に人間を抜くこと幾百尺の上にある。鞋を没する沙は淨うして纖埃なし。踏みて行けば、珊々として聲あり。已に二合目に至り、更に三合目に至る。石室あり。茶を賣り、菓子も賣り、又卵と草鞋とを賣る。凡そ一合毎に石室あり。皆山骨の露出する處を相し、之を背にして屋を作り、圍むに累石を以てし、僅かに一面を闕きて出入する處とす。遠く望めば隆然として凸起せり。室に入れば方三四弓、直ちに地上に板を列ね、上に席を布くのみ。頗る幽陰なり。

已にして四合目に至れば、足柄・愛鷹及び甲州の諸山はみな余が鞋底にあり。大地の蒼々然たる處に兩碧の甚だ明らかなるを見る。南なるは富士の沼にして、東なるは甲州山中の湖なり。小なること盆池のごとし。膚寸の雲の帯び來れる雨を受くとも、水は當に四坡に横溢すべきかと疑はる。皆を決すれば、東海の濱、一帶百里、水は南溟の雲に入る。その間を斷ちて、一道の霓よりも澹きものありて走る。これ紫瀾の岸を打つて回る影なり。時は暮に近し。雲あり、相逐うて上峯より落ち來り、皆下界に堆屯し

*雲觸石而出、膚寸而合。一不頃刻の大雨。

四坡—めぐり
のつつか
地を決すれば
のさくこと
るまらふ
南溟—南海

て流れず。風の吹き披くあれば、青絲を穿ちたる銀針ありてこれを縫ふ。その青絲に似たるものはこれ田子の浦に浮べる三保の松原か。何ぞそれ纖々として縷の如き。その銀針に似たるものはこれ富士川か。三十六瀬、何ぞそれ一芥を浮ぶるに勝へざる。既にして、山影皆消ゆ。雲既に人寰を鎖せり。嶽上の奇は將にこれより始らんとす。

一四 不二の神山その二 遅塚麗水
忽ち脚下に波濤の如き聲を作すあり。一望平布の

三十三瀬—富士川に
は三十三の瀬あり
か、銀の如く白く光り
て、塵土を以て見せ
れば、らうをまかせた
一芥を浮ぶるに勝へ
るといへばあらん、

一望平布の如く
すかきりのみ
あかせる

羊角——風つめいふこと

師範學校國文教科書本科用卷五

九四

*搏_二扶搖_一、羊角而上者九萬里。

雲は争ひ立ちて羊角^{*}して嶽に登る。これ風雨の人間に満つるなり。雲急に余を追ふ。余乃ち遙方の石室を望みて走る。雨は逆上して、濺ぐこと亂雹の如し。草帽^{あきり帽子}飛ばんとすること數次。身は雲と相先後す。漠々たるもの既に行膝を没せり。超乗して走りて、纔かに石室に到れば、雲は既に咫尺にあり。余を石室のうちに窮追して、更に上峯に向つて走る。走る處石沙皆活く。石室の人晒つて迎へて曰く、これ過雨なり。頃刻にして霽れなんと。言未だ終らざるに黑風白雨、室に満つ。膝を抱きて俟つこと少

超乗——雲をのりこし

咫尺——目前の同じ分

黑風白雨——暴風

時にして、石室の戸に微紅あり。走り出でて、さきに余を追ひし雲を望めば、既に上頭の寶永山に觸れて碎け、更に夕暉に照されて、雨は千顆萬顆の珠璣となり、紛々として中天より落つ。手を舉げてこれを受くれば、光彩一瞬にして消え、たゞ新に亂暈の痕を衣上に添ふるのみ。顧みて人寰を見れば、正に是黄昏なり。夕暉の前に雲あり。奇峯を成して争ひ起つ。みな日を銜めるがために紅く輝き、周圍に金精の色を放てり。既にして、朱丸の如き夕暉急下すれば、奇峯忽ち没し、天地寥廓、皎然たる大月東天に浮ぶ。

皎然——白く光りてあ
るさま
宛々——
まこと、
金精の色——金おのり
の衣の點々——珠璣の
かき見えて、
か、
給冷——れが散るさま
亂暈——暈は日
月のあき、お角の根
の衣の點々——珠璣の
かき見えて、
宛々——
まこと、
金精の色——金おのり
の衣の點々——珠璣の
かき見えて、

一四 不二の神山その二

五

仰いで、上峯を望めば、雲あり。俯して下界を瞰れば、雲あり。上下の雲間に、唯鐵よりも黒き一大絶壁の斜に懸垂するあるのみ。四顧すれば、縹緲蒼茫、身は天柱を攀ちて紫微に入る想あり。この高遠の景に對しては口言ふ能はず、筆描く能はず。神澄み、氣清く、愴然として涙の隕つるを知らず。爛沙の上を度れる一路の微白なるを踏み、磬折して登り、終に行きて六合目の石室を得たり。石室の主人爐に擁して坐す。驚き起ちて迎へて曰く、暮夜獨往すること貴客のごときは稀なり」と。余、寒きこと

*天帝之座也。

天帝の座也。

磬折して

石室に

坐す

驚き起ちて

迎へて

縹緲蒼茫

身は

磬折して

石室に

坐す

暮夜獨

琴筑を

鳴らす

鏘然

たるもの

甚だしきを以て、直ちに主人の座を奪うて坐し、且飯を命ず。粗糲にして食ふべからず。枯魚一枚、豆腐汁一椀、また箸を下すに堪へず。この地、海を抜くと七千尺。氣壓の微弱なるが爲に、飯を炊げども之を熟せしむること能はず。糯を加へて纔かに粘力を添ふといふ。饑ゑんことを恐れて、勉強して數椀を傾け、終に衾を擁して臥す。枕邊に鏘然たるものあり。琴筑を鳴らすのがごとし。これ屋下の雪の解けて、筧を傳ふ聲なり。久しうして眠り得ず。首を上ぐれば、小燈焰なく、石室の中、凄陰幽寂、屋外たゞ風

塵を聞くのみ。
 未だ曉ならざるに、短夢回り來れば、主人は既に爐に
 踞し、飯を炊ぐ。余既に萬古の雪に漱ぎて心下に一
 塵なし。靜坐して日出を待つ。既にして、主人麾き
 て曰く、日將に出でんとす。と。起ちて屏邊の平石に
 踞してこれを看る。初め東方昏黒の裏、紫氣ありて
 搖曳し、漸く變じて微紅となる。余、眸を凝らす。俄
 かにして、炬の如きものあり、渥丹のごとし。或は昇
 り、或は降る。會、彷彿として上峯に天鷄の聲を聞く。
 石室の人曰く、これ淺間神社の鐸聲なり。と。余、屏息

して立ち、石室の人跪きて拜す。須臾にして、渾沌の
 ところ依稀として五彩の龍文をなし、次第に鮮明を
 加へて、光芒陸離、遂に混じて猩血の色をなす。中に
 物ありて浮べり。雙黃の卵子の如し。忽ち合して
 鎔銅の色をなす。石室の人曰く、是太陽なり。と。鎔
 銅の色は再び變じて爛銀の色をなし、環らすに紫金
 を以てし、終りに白熾鐵の色をなす。忽ち鐵椎の一
 下に逢ふが如く、百千道の金箭天を射、猩血の色溟中
 に逆だち、太陽之を追うて躍如として昇る。天地茲
 に清明なり。

渾沌——混沌の列然
 依稀——さかかろ
 五彩の龍文——五色の
 龍の模様
 光芒陸離——光が四
 方に分散するさま
 猩血——猩々の血の如
 く赤き色
 爛銀——銀をとかし
 た色
 此第一——赤銅のこ
 り
 白熾鐵——白くやま
 る鉄
 百千道の金箭——百
 千道の金箭
 金は削け、善き金にて
 作ゆる箭なり

して立ち、石室の人跪きて拜す。須臾にして、渾沌の
 ところ依稀として五彩の龍文をなし、次第に鮮明を
 加へて、光芒陸離、遂に混じて猩血の色をなす。中に
 物ありて浮べり。雙黃の卵子の如し。忽ち合して
 鎔銅の色をなす。石室の人曰く、是太陽なり。と。鎔
 銅の色は再び變じて爛銀の色をなし、環らすに紫金
 を以てし、終りに白熾鐵の色をなす。忽ち鐵椎の一
 下に逢ふが如く、百千道の金箭天を射、猩血の色溟中
 に逆だち、太陽之を追うて躍如として昇る。天地茲
 に清明なり。

大觀——社人なる者早や、
結束——身正衣冠をす
ふことと、

余この宇宙の大觀を看るを得て胸宇の海の如く闊
きを覺ゆ。石室の人と共に食し、連りに數椀を傾け
結束して出づ。石室の人曰く、これより峻なること
甚だし。徐々として脚を攢めて登れ。然らずんば、
呼吸切迫して、上峯に達する能はざらん。と。謝して
行く。仰ぎ見れば、崢嶸たる絶頂は四峯を成して高
く天を衝き、無心の雲もまた畏れて近づき飛ばず。
下瞰すれば絶壁斜に走りて直ちに人寰に至り、一物
の遮るあるなし。爛沙漸く大に、處々に山骨を露す。
その處、常に雪あり。鞋痕、碎銀の上に狼藉たり。掬

崢嶸——山の峻なりは
しきさま、

碎銀——雪のつぶらさ

してこれを食はんとし、驚歩して淨處に就く。萬古
の雪、冷かにして、脾肝に透徹す。路益急なり。盤折
して登り、纔かに八合目の石室に至る。これより、路
愈峻なり。鞋底幾たびか摩敝して、終に襪に及ぶ。
踞して鞋を易ふること兩三次。獄神の棲處は既に
近し。奇巖處々に立つ。その狀、巨魔の如し。既に
して九合目に到り、遂に絶頂に達す。(日本名勝記)

脾肝に透徹す——腹
の中の臟腑にしみわた
ること、
盤折——うねりと
をれまわす
獄神——同前市中社
肉神社を指せり

一五 國體の精華

穂積 八束

我が日本の國體と國民道德との基礎は祖先教に淵

源す。祖先教とは祖先崇拜の大義を謂ふ。我が日本民族の固有の體制は血統團體たり。血統團體とは、民族が其の同始祖を敬愛するに由りて共存團體を成し、祖先の威力に服従するに由りて平和の秩序を維持するを謂ふ。小にしては家を成し、大にしては國を成すものなり。

祖先崇拜の大義は血統團體を構成し、維持する原由たると同時に、血統團體の存續は亦祖先崇拜の大義を鞏固にし、深遠にする成果あり。二者相待ちて消長し、須臾も離るべからず。而して、我が固有の國民

消長——栄枯と同じさ
かえおとろ

軌轍——軌も轍も共なり
車の中の軌
人のふし
をふ

協和——和衷協力の略
心を合せ力を合すること

道德たる忠孝友和信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に溯源し、血統團體を保維する軌轍たり。我が堅固なる國家の體制は祖先教の基礎の上に立つ。これを千古に維ぎ萬世に傳ふるは、我が民族の特質にして、我が國體の精華たる所なり。

人は獨立孤存し得べき者にあらず、共同團結して、以て其の生存を全うす。而して其の團結する原由と形體とは固より一ならず。但し利害を以て集散し、約束を以て協和を維持する者は、其の團結固からず、又久しからず。利害の異同は情況に隨ひて時に變

人為——自然のなごり
人のこころへたゞもの

團圓——
座三集り
威靈——
血脈相通——
相即——

轉し、人為の約束はまた人為を以て解除すること
免れざればなり。血族相依るは自然の團結なり。
兒孫が父母の保護の下に團圓するは社會の始にし
て、民族が同始祖の威靈の下に國を成すは天賦の團
結たり。血脈相通ずるは天然の連鎖なり、人為を以
つてこれを絶つことを得ず。利害の觀念の外に超
越し、敬愛の至情に由りて離るべからざる共同生存
を成す者は血統團體なり。
血統は之を祖先に受け、之を子孫に傳ふ。故に其の
團結は永久なり。血族關係は利害を以て離合斷續

忠順——
家長權——
加その家族に對して
有る權
の委

するを得ず。故に其の團結は鞏固なり。而して之
を統一する者は祖先の威力なり。故に子孫がその
祖先に對するや、敬愛の情厚く、忠順の念深し。家に
在りては、家長は祖先の威靈を代表し、家族に對して
家長權を行ひ、國にありては、天皇は天祖の威靈を代
表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權
とは共に君父が其の祖先の慈愛する子孫を祖先の
威靈に代りて保護する權力なり。
吾人の今日あるは、吾人の祖先が血統團體を建設し、
維持し、遺傳したる餘惠なり。何が故に血統相近き

者が相寄りて家を成し、氏族を成し、又國を成したるか。祖先を崇拜し、其の威力と慈愛との下に生存の保護を全うせんと欲する天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛し、其の慈愛なる保護の權力に従順なる至情は、延いて之を其の父母の父母に及ぼすべし。吾人の祖先の祖先は即ち畏くも我が天祖なり。天祖は國民の始祖にして、皇室は國民の宗家たり。父母拜すべし、況や一家の祖先をや。一家の祖先拜すべし、況や一國の始祖をや。家長の位は祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母は

現世に在る祖先たり、天皇は現世にある天祖たり。父母に孝なるべき所由は、即ち皇室に忠なるべき所由にして、之を一貫する國教は祖先の崇拜なり。此の大義は吾人の祖先が國家を成したる基礎にして、吾人が之を永遠に維持する軌道たるものなり。人は信仰に因りて動作す。限定せられたる人智は、宇宙の現象を総合して之を其の根柢の眞理に歸結し、絶対の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は、肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又子孫を慈愛する父母の威靈は、現世に顯界に

限定せられたる人智
吾人の知能は經驗
的のものにして現象
の内に限られたるものなり
たゞ現象を以てするのみ
執着して哲學的
根本原理を自覺する
る能はざることより、あ
る信仰に因りて行動
すことなり

絶対の理法

相對の理法の外他

對立するものなき根本原理

幽界——幽界、目に見えぬ
此の世ちよぬ世界

於て其の肉體を喪ふとも、尙幽界に在りて其の子孫を保護することを確信したり。是、祖先崇拜の大義の淵源にして、敬神の我が國教たる所由なり。我が固有の國體民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし。家は祖先の威靈の住む所、國は天祖の威靈の住む所にして、祖先の威靈は家國を防護す。吾人は祖先の生命の繼續にして、子孫は吾人の生命の延長たり。祖先の祭祀を不朽に絶たざるは、吾人の肉體に於て代表せらるゝ祖先の生存を永遠に傳へんと欲するなり。祖先と吾人と子孫とが、家國の觀念に

子孫は吾人の生命の延長
吾人及の吾人の子孫は
本来別物にあらず故
子孫は吾人の生命を
引きついでたつもの
と見ざるを得

於て同化し、其の繁榮にして永久なる存在を全うする大義此に存す。祖先の靈位を現世に代表する君父に忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、祖先が其の子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の共愛、悉く皆我が同祖の祭祀を重んじ、之を永遠に傳へ、祖先の家國の鞏固にして永久なることを欲する祖先の遺志に適從する道ならざるはなし。我が祖先崇拜の大義は國民の確信に出で、不朽の國體は是に由りて其の基礎を立て、國民の道德は是に由りて深厚なり。斯の國斯の民を、

千古に溯り萬世に亙りて保持する者は、此の國體の精華たる我が固有の祖先教の力なり。(愛國心)

一六 王陽明

末廣 鐵腸

古往今來、或は學問を以てし、或は道德を以てし、或は功名事業を以てし、其の師表とすべきもの一にして足らず。而して、余の特に王陽明先生を仰ぐ所以は、即ち性理學上に一活眼を開き、學問・道德・事業を打して一丸とし、内外一致、精粗閒なき妙あればなり、支那に於て性理學を中興せしものは、實に程朱の二家

師表——模範と同じ
性理學——宋代理學の
一派の學子程

程朱——程顥程頤の兄弟
と朱熹と共ニ宋代の儒
學者

極致——方圓相容
ざること、くひなき

とす。彼らは物に就いて理を究むるを以て工夫とす。然れども時位處の異なる、何ぞ豫め一定の道理あるを得んや。且世界の事は機に應じ、變に従ふ活手段なかるべからず。二家は聖人の道といふ一の



王陽明

標本を立て、天下を率ゐて之に従はしめんとし、遂に學問と功業との間に納

鑿を生じ、儒者は性理を高談して事業を卑しめ、功業に志すものは儒學を以て經世に關係なき者となすに至れり。

初溺於任
俠再溺於
騎射三溺
於詞章四
溺於神仙
五溺於佛
氏正德丙
寅始歸正
于聖賢之
學
貴州省貴陽
府修文縣

陽明の出づるや、儒學を研究して傍ら老莊釋氏に及
び、以て安心立命の地を求めんとして、未だ得る所あ
らざりき。其の龍場驛に謫せらるゝや、蛇虺瘴癘の
間にあつて、仇敵の其の後を窺ふあり、自ら思へらく、
「得失榮辱皆能く超脱す。唯、生死の一念尙未だ化せ
ざるを覺ゆ」と。乃ち石槨を爲り、自ら誓うて曰く、吾
た「命を竝つのみ。」已にして思ふ、聖人は是に處する、
更に何の道かあるを。忽ち中夜大いに格物致知の
旨を悟り、是より我が靈明の本心を以て萬事に酬酢
し、而して文書錢穀兵馬刑政、一として我が本心を鍊

安心立命
天命に安んず
心の安らわ
たること
蛇虺一蛇は
蛇に二蛇は
小蛇は蛇も
この蛇は
この蛇は
の毒を
格物致知の旨を悟り
格物致知は大徳の教
の徳りしなりとて格物致知
あり天下の事

磨する地にあらざるなきを知る。

其の地方官となつて兵馬を司るや、漳寇を始とし、横

水桶岡三瀨大帽瀨

頭等の諸寇を平げ、

恩威並び行はれ、人

民其の徳に懐く。

寧王の亂を起すや、

天下震動し、明の社

稷將に危からんとす。陽明、詭計を以て寧王を誘ひ、
一戦してこれを擒にせり。陽明の事に處し兵を用

武宗正德十
四年。

社稷一社は土の神
環は穀の神
候國は狩
の先づ
國宗と存
國土の義とあり

其理を明
如をい
酬酢
格物致知の旨を悟り
格物致知は大徳の教
の徳りしなりとて格物致知
あり天下の事
文書の
錢穀
兵馬
刑政
漳寇
横
水桶岡
三瀨
大帽瀨
頭等の
諸寇を
平げ、
恩威並
び行は
れ、人
民其の
徳に懐
く。
寧王の
亂を起
すや、
天下震
動し、
明の社
稷將に
危から
んとす。
陽明、
詭計を
以て寧
王を誘
ひ、一
戦して
これを
擒にせ
り。陽
明の事
に處し
兵を用

神出鬼没—鬼神の如く

師範學校國文教科書 本科用卷五

去没か自
在ること

端倪—端は山巔なり
倪は水涯なり 山の高き
水のはてしなくして則
り知る能はざるが如く
本末相違を測度する
に如くを云ふ

良知鍊磨の工夫—
先天をなほはれる良知
を鍊磨するを以て
陽明先生の意なり

心中賊—私欲を指す
神色自若—顔色のかわら
ぬこと

明鏡止水—物に動はれず
その影を自らし物ある
は影も亦ある 而かも
鏡と水とは射やも木
ある心はく然らざらんし
陽明の心 空に射る如く

ふるや、神出鬼没、端倪すべからず。其の然る所以のものは皆良知鍊磨の工夫より來れり。其の三淵を征するや、書を州人に寄せていはく、破山中賊易、破心中賊難。と。其の寧王と交戦するにあたり、軍中に坐して講學する、平生の如し。謀者走つて前軍の利を失ふを報ず。座中皆怖るゝ色あり。陽明出でて謀者を見、退いて座に就き、また前言を續ぎ、神色自若たり。須臾にして賊兵大いに潰ゆるを報ず。座中皆喜ぶ色あり。陽明出でて謀者に接し、座に就きて神色復始の如し。彼、平生の大功、皆この明鏡止水の心

純篤—純は心、篤は心
を厚くすること

何れ内外異同を問はんや
我が主張する學問の
大體、時とあらんれば
國の内外、純の異同を
問ふ必要なしとあり

より來る。或人問ふ、兵を用ふる術ありや。曰く、學問純篤、此の心を養ひ得て動かざる、乃ち術のみ。凡そ人知の相距る、甚だ遠からず。勝敗の決は陣に臨んで後、卜するを待たず。唯此の心の動くど動かざるとの間にあるのみ。世の學者は往々陽明を斥けて佛とせり。夫、學問は時世に従うて進歩せざるべからず。學を成すは須らく蜂の花を吸うて蜜を製する如くなるべし。自ら取つて以て我が實學の用となすべくんば、何ぞ内外異同を問はんや。孔孟は處世の道を論じて、其の

性理を説くや未だ精微ならず、釋氏は解脱の妙あるも、世間と離るゝ弊なき能はず、而して、世の英雄豪傑も學問の大本領なれば、萬變に酬酢して誤なき能はず。陽明は高く心鏡を掲げて宇宙の萬象を照し、道德事業、一以て之を貫き、後世の爲に實學の基礎を開く。孔孟を以て釋迦を兼ね、實に豪傑の事業を成せるものといふべきなり。余の陽明を仰止するは、則ち之が爲のみ。(古人評論)

一七 月雪花

芳賀 矢一

仰止——此は陽明の事
味ち——あるべきなり

玲瓏——照りかゞやく
美しくすきとほるさま

有象無象——有象は現象の意なり、無象は現象なき意なり、
色香味触を具するもの、
有象は、
無象は、
物に同じ

赫々たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は仰いで見ることも出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、羣陰皆影を伏して、大小の有象無象悉く照破されるのであるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせて了ふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、高潔無垢、崇美と稱ふべき、やさしい光である。休息、安靜の夜には最もふさはしい、この光に對しては誰しも人生

油然
轉
のわくは用
の感
思
情
の
起
る
親

の慰藉を感ずる。詩的情緒が油然として涌く。晝の閒は猛獸と鬪つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帯の椰子の陰、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隅なく世界を照す月光の、人の胸懷にしみ渡ることは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。見る人の心「うちむかふ月は一つのかげながら、うかぶはちぢの思なりけり。」である。東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。之を嘆嗟し、之を

嘆嗟
心
の
感
情
の
起
る
親

*荷田蒼生子の詠。

*花ならば咲かぬ梢もまじりなん、なべて雪ふるみ吉野の山。

吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の言語に充ち満ちて居る。天文學者は云ふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。この冷たい光が古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。雪は月よりも、一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや、花ならば咲かぬ梢もまじりなん。なべて雪降るみ吉野の。といふやうに、眼に入るもの、悉くその

十二樓臺—見世帯の仙宮
にありといふ、十二樓の高
樓あり、
廣寒宮—月の都

下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色。十二樓臺玉作層」の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川を残して、山といはず、野といはず、また、く中に瓊玉を敷く壯嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しもかはらぬ。花紅葉色々の眺めはもとより美しいに相違ない、花の

壯嚴—重々として
たつこと、

散つたのちの新緑の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の功を盡したるものではあるまいか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界程樂しいものではないであらう。雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價值は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲きみだれるの

詩趣—詩の趣味—
持心のあらはれしむべき
おもむき

供養—死人の霊を養ふは佛
前にお供物を供へし
田舎のうらさし

は、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美
しい色の外に、かうばしい匂さへもつて居る。菜や
大根の如く食用の爲に作つた野菜類の花でも、無限
の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價の
生じたのは無理は無いが、山の花、野の花、いづれも月
や雪と同じ様に、一文錢を要せぬのである。人世に
花なくんば、いかばかり寂寞を感ずるであらう。閑
寂を旨とする茶室の内にも、牀の間に一輪の花は必
要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎ん
だのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも

*年ふれば齡
は老いぬ、
しかはあれ
ど花をし見
れば物思も
なし。

花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。
月雪のながめはその高潔を愛し、その清淨を貴ぶが、
花はその豔麗華美を以て人生を飾り、人心を慰める
のである。花やぐ、花やか、花々しい、華美、華麗、華奢等
の語は皆花に基づいた語である。古今東西の詩歌
は擧げるだけ愚である。余は唯、花をし見れば物思
もなし。といふ古歌を以て、總べてを總括し得べしと
信ずる。
月雪花三つのながめは各その特長がある。いづれ
を前、いづれを後といふことが出来ぬ。

康資王母の詠。

山櫻花の下風吹きよけり、

木のえとごとく乃雪のむらぎえ。

これは花を雪にたとへたのである。

冬ふがら空より花のちりくるは、

雲のゆなは春にやあるらん。

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し、吳山の雪靴はかんばし、楚地の花、

の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花

を手折る。

これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞

清原深養父の詠。

謠曲葛城の句。

檐頭の柴はの 楚地の花は 笠は重し 吳山の雪靴はかんばし 楚地の花 肩上の笠には無影の月を傾け 檐頭の柴には不香の花を手折る。

不夜城は夜も書のかげに 照らぬ繁華を倫敦の住民も 秋冬の半年は美しい 月の光を見ることが出来ない。我等日本人が昔も

して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪をめでぬ人も無い。思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中冰雪に鎖されてあるアイスランドでは氷は即ち人の家である。この地の人は寸紅の目を楽しませるものもたない。又之に反して、全く冰雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たことがない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して夜深を知らぬ繁華を倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人が昔も

今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。月雪花のながめは古人の歴史が加つて一層の感興が増す。

伊藤仁齋の詠。

世々を経てながめし人の數よまよ

我をとゆるせ、秋の夜乃月。

月は古來の歴史を照す鏡である。

年々歳々花相似、歳々年年人不同。

白頭縦作花園主、醉折花枝是別人。

鬢の霜、頭の雪。人生の感は花を見えますく、繁く、

唐詩。

唐詩。

雪を見ていよく多し。二千五百年來、月雪花三つの眺を有し得たる、我等祖先の遺蹟は如何に多くの感興を傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。(月雪花)

一八 比良の山風

五十首歌奉りし中に

湖上の花枝 宮内卿

花をよみ小比良の山風吹きたるわ
こゝろ行く船のあゝ見ゆるまで

官邸御一をよみ大史師
先の昔は、後鳥羽天皇
皇の宮サたり最も
和歌長川傍

五十首歌ありし時寂蓮法師
暮れゆくまのみなをた知るよも

寂におつる宇治の紫母

題 知らむ 藤原家隆朝臣

つらにきんまぬ夜あつたの杜鵑

つらとむらさきむらさきの空

題 くらむ 西行法師

心なき身もあはせは知れぬ

鴨のつ澤の秋のゆづり

五十年歌ありし時攝政大臣

雲はみれをいけらる 秋風浅

松は三つあり

松ののの月をさる

有首歌奉りし時藤原定家朝臣

駒とあり袖うらやまを

さのわりの雪の夕暮

定家朝臣が母身まわし後秋の

ころ墓所近き堂にとりてよ

みづかき 皇太后宮大夫俊成

まねびがたし。あるは深き山へ逃げ籠り、遠き世界
 に落下り、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかゞあ
 らんと、君も御心亂れておぼし惑ふ。豫ては猛く見
 えし人々も、實の際になりぬれば、いと心あわたゞし
 く、色を失ひたるさまども頼もしげなし。
 六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて遂に
 身方の軍敗れぬ。荒磯に、高潮などのさしくるやう
 にて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあ
 きて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。
 あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍

一九 新島守

いつの年よりも五月雨はれまなく、富士川・天龍など
 えもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打渡し難
 ければ、攻めのぼる武者ども、あやしく艱めり。か
 かれども、遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の武者も
 出立つ、其の勢六萬餘騎とかや。宇治・瀬田へ分ち遣
 はす。世の中ひゞきの、しるさま、言の葉も及ばず、

(新古今和歌集)

龍馬一駿馬は同じき
 龍馬は後鳥羽院と物
 君は後鳥羽院と物
 一幸々、
 ひゞきのしるさま
 とを下へとさやくさま

*承久三年。

物にぞ當り惑ふ
 前夜をばし物につぎあ
 ちる程のさわぎをうふ

まねびがたし。あるは深き山へ逃げ籠り、遠き世界
 に落下り、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかゞあ
 らんと、君も御心亂れておぼし惑ふ。豫ては猛く見
 えし人々も、實の際になりぬれば、いと心あわたゞし
 く、色を失ひたるさまども頼もしげなし。
 六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて遂に
 身方の軍敗れぬ。荒磯に、高潮などのさしくるやう
 にて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあ
 きて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。
 あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍

計らひおきてつゝおきて
は、狭しと定むること
こは時、常時の
天加常都の事
處理ありき

鳥羽殿山城國地守
後鳥羽院。

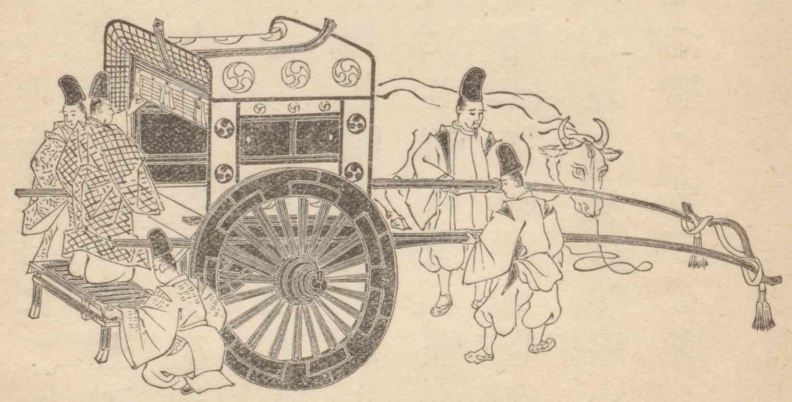
綱代車綱代竹又は
草あいに
斜に編みたるもの、
れを以て張れる
としかへす
ものにもが
なや、世の
中をありし
ながらのわ
が身と思へ
ば。
右京權大夫
藤原信實。

計らひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷
し奉るべしと聞ゆれば、女院宮々處々におぼし惑ふ
こと更なり。本院は隱岐の國におはしますべけれ
ば、まづ鳥羽殿へ綱代車のあやしげなるにて、七月六
日入らせたまふ。今日を限の御ありき、あさましう
あはれなり。「ものにもがなや」とおぼさるゝもかひ
なし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一
つ二つや餘らせたまふらん。まだいとほしかるべ
き御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。
七條院へ奉らせたまはんとなり。かくて同じき十

いみじう
この世

順徳天皇。

仲恭天皇。



(考圖車輿)車代綱

三日に御船に奉りて、遙かな
る波路を凌ぎおはします御
心ち、この世の同じ御身とも
おぼされず。いみじう、いか
なりける世々の報にかとう
らめし。新院も佐渡の國に
遷らせたまふ。まことや七
月九日、帝をもおろし奉りき。
この卯月か、とよ、御讓位とて
めでたかりしに、夢のやうな

四子あり
 の事あり
 上達部
 藤原大臣を公と
 位以上
 皇親
 殿上人
 宸殿の
 行され
 任以上
 位の職
 土御門上皇
 *

り。七十餘日にておりたまへるためしも、これや始
 めなるらん。唐土にぞ四十五日とかや位におはす
 るためしありけるとぞ、からのふみ讀みし人のいひ
 し心ちする。それもかやうの亂やありけん。さて
 上達部殿上人、それより下、はた残りなく、この事に觸
 れにし類は、重く、軽く、罪に當る様いみじげなり。
 *中院は初めよりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め
 申さねど、父の院遙かに遷らせたまひぬるに、のどか
 にて都にあらん事いと恐あり。とおぼされて、御心も
 て、その年閏十月十日、土佐國の幡多といふ處に渡ら

若宮
 の白子
 親王
 宰相中將
 宰相中將
 院在子
 土御門帝
 生母
 通子
 後嵯峨帝
 生母
 通方
 承明門
 院在子
 土御門帝
 生母
 通宗
 後嵯峨天皇
 親通
 通子
 通方
 承明門
 院在子
 土御門帝
 生母
 通宗

せたまひぬ。去年の二月ばかりにや若宮いできた
 まへり。承明門院の御兄人に、通宗宰相中將とて、若
 くて失せたまひにし人のむすめの御腹なり。やが
 てかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉りた
 まひて、近く侍ひける北面の下臈一人、召次などばか
 りぞ御供つかうまつりける。いとあやしき御手輿
 にて下らせたまふ。道すがら雪かきくらし、風吹き
 あれ、吹雪して、來しかた往くさきも見えず、いと堪へ
 がたきに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かる
 に、

前世の因縁ありて

うき世よはるゝれとて去そ生れけ免

ことより知らぬわがなみどかか

「せめて近き程に。」と、東より奏したりければ、後には阿波の國に遷らせたまひにき。

後鳥羽院。

四つにて位に即きたまひて、十五年おはしましき。

下りたまひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ

天の下には同じ事なりしかば、すべて三十八年が程

この國のあるじとして萬機の政を御心一つにをさ

め、百の官を従へたまへりしそのほど、吹く風の草木

を靡かすよりもまされる御有様にて、遠きをあはれ

萬機一多の世の
政務あり

津の國のこやの
昆

津の國のこ
やとも人の
いふべきに
ひまこそな
けれ、葦の
八重ぶき。

み、近きを撫でたまふ御惠、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらんことをおほしき。藐姑射の山の峯の松もやうく、枝をつらねて千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を経ても、空ゆく月日のかぎり知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありく、てよしなきひとふしに、今はかく花の都を、さへたち別れおのがちりぐにさすらへ、磯の苦屋に軒を竝べて、おのづからことどふものとは、浦に釣する海士小舟、鹽やく煙の靡く方をもわが故郷の

難波の葦
くための序
詞なり昆
陽野も難
波も芥津
の國にあり
對面

雨霞の洞
これも世の御

所といふ、仙
西踏を當りて
さいものといふは、その所を呼ぶかしのふ。

するべかとばかり眺めすごさせ給ふ。御すまひどもはそれまでと月日を限りたらんだに、明日知らぬ世のうしろめたさにいと心細かるべし。まいて何時を果と廻り逢ふべき限だになく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡したまふべき御様ども、くちをしといふもおろかなり。
後鳥羽上皇の御性原のままをまひり
 このおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山かげにかたそへて大きやかなるいはほのそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。

*いづくにもすまれずばたどすまであらん、柴のいほりのしばしなる世に。

水無瀬殿
 山城國乙訓郡あり
 後鳥羽上皇の造りみか
 かせ給ひて四季をり
 をりに行幸まししと
 ころ
 こちなく、こと痛この約
 はけ、このまゝ

誠に、柴の庵のたゞしばし。とかりそめに見えたる御宿りなれど、さるかたになまめかしく、故づきてしなさせたまへり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるぐと見やらる、海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹き來るを聞しめして、われまそを新島守よ、おきの海は
此の島に移り来て、しなれもの心は
 いらね波風こゝ流して吹け。(増鏡)

二〇 日野の閑居

鴨 長明

跡を隠す 世の交際
 竹の簀子 竹の縁側
 落日をうけて眉間の光とす
 木葉の影 色々の雲のはたてをかざりにて入日や彌陀の光なるらん
 帳の籠 帳は幕の類
 皮籠 華の包 かつこれ
 生要集 僧侶
 折竹 竹の類
 爪木 木を折る

今、日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日ユレがくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、中には西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置しまつりて、落日をうけて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢竝トキに不動の像をかけたたり。北の障子の上に、小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置けり。すなはち和歌管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏・繼琵琶是なり。東にそへて藤のほ徳の長くあつたものどろを敷き、つかなみを敷きて夜の牀とす。東の垣のうらに窗をあけて、こゝに文机を出せ

生要集 僧侶
 折竹 竹の類
 爪木 木を折る
 つたみ 蔓草
 瓜木 木を折る
 観念 佛の像を
 西の垣 西の壁
 佛説 佛の教
 死の山路 死の道

り。枕の方に爐あり。これを柴折りくぶる便とす。庵の北に小地をしめて、あばらなる姫垣女の垣を圍ひて園とす。すなはち諸の薬草を植ゑたり。假庵の有様かくのごとし。その處の様をいはず、南に竈あり。岩を疊みて水を溜めたり。林、軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木の葛跡を埋めり。谷繁けれど西は晴れたり。観念の便なきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲あを雲の如くにして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。語らふごとに死出の山路を契る。

二〇 日野の閑居
 鳥をシテノサヤセとありありあやなし書けるを、時鳥に向のおのれもさしは

空蟬の世——空蟬の世、人命

師範學校國文教科書本科用卷五

の世にあるも蟬のも
ぬけのあつても四つを
てあるののしき
ものあつたが
いふなり

罪障——佛
親口罪あ

世の中を何
にたとへん
朝ぼらけ漕
ぎゆく舟の
あとの白波。
澤陽江頭夜
送客楓葉
荻花秋瑟瑟。
桂大納言源
經信、後、
大宰權帥た
り。琵琶の
名手。三船
の名譽を得
たり。

秋は蜩の聲耳に満てり。空蟬の世を悲しぶかと聞
ゆ。冬は雪を憐ぶ。積り消ゆるさま罪障に譬へつ
べし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、み
づから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥
づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、獨り居
れば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもな
ければ、境界なければ、何につけてか破らん。もし
跡の白波に身を寄する朝には、岡の屋に行きかふ船
を眺めて、満沙彌が風情を盗み、もし楓の風葉を鳴ら
す夕べには、潯陽の江を思ひやりて、源都督の流を習

都督の屋——大宰師の屋

秋風の樂——樂名

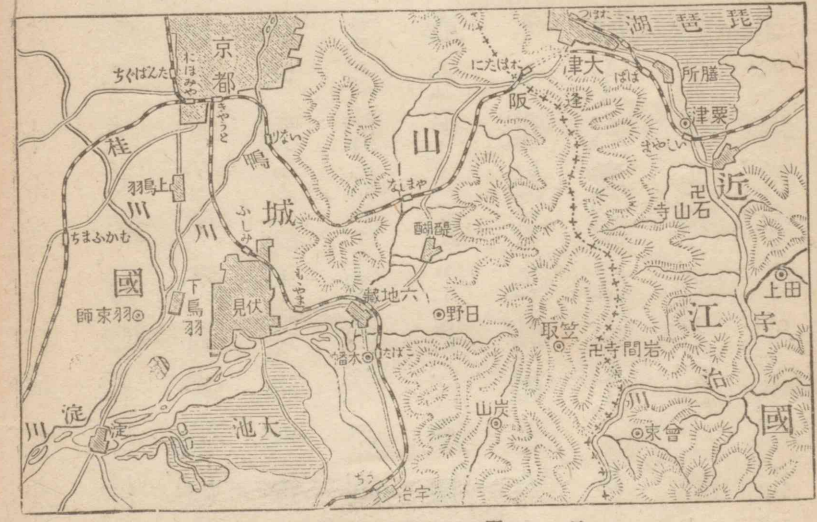
流泉の曲——樂名

ふ。もし餘りの興あれば、しばぐ松の韻に秋風の
樂をたぐへ、水の音に流泉の曲を操る。藝はこれ拙
けれども、人の耳を悦ばしめんとにもあらず。獨り
調べ、獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。
また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る
處なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。
もし徒然なる時はこれを友として遊びありく。彼
は十六歳、我は六十。その齡ことの外なれど、心を慰
むることとはこれ同じ。或は茅花を抜き、岩梨を採る。
また零餘子を盛り、芹を摘む。或はすそわの田井に

茅花——花
岩梨——梨
すそわ——田井

穂組 穂穂を組みし
 明は白掛と神
 情あるもの

あやみ煩ひなくし
 志遠くつらき時は
 遠く遊覧と思ふ
 時はその意
 炭山を越え、笠取を過ぎて、
 城國宇治郡あり
 山石山あり
 江國光朝あり



日野附近圖

至りて、落穂を拾ひて、穂組
 を作る。もし日うらゝか
 なれば、嶺に攀上りて、遙か
 に故郷の空を望み、木幡山
 伏見の里鳥羽羽束師を見
 る。勝地は主なければ、心
 を慰むるにさはりなし。
 あゆみ煩ひなく、志遠くい
 たる時は、これより峯續き
 炭山を越え、笠取を過ぎて、

琵琶の名手。
 逢阪の關に
 隱栖す。
 攝津の歌人、
 後、近江國
 曾東山中に
 隱る。
 山鳥のほろ
 ほろとなく
 聲さけば父
 かと思ふ
 母かと思
 ふ。

岩間に詣で、石山を拜む。もしはまた粟津の原を分
 けて蟬丸翁があとをとぶらひ、田上川を渡りて猿丸
 大夫が墓を尋ね、歸るさには折につけつゝ、櫻を狩り、
 紅葉を求め、蕨を折り、木の實を拾ひて、且は佛に奉り、
 且は家苞にす。もし夜静かなれば、窗の月に古人を
 忍び、猿の聲に袖を濕す。叢の螢は遠く眞木島の篝
 火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似
 たり。山鳥のほろくと鳴くを聞きて、も父か母か
 と疑ひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても世に
 遠ざかる程を知る。或は埋火をかきおこして、老の

況や眼をこぼしぬか
おのれぬき思ふあまこ
寂けさあのか見
へ、かんのねし
思想の多舟楫
かいらんは、このみ
ルとらあらし
心をとく
しむるは、さ
しむるは、さ

風早の三保
暖の國
浦の舟人

シテ 天女
ワキ 白龍
ツレ 漁夫
風早の三保
の浦わを漕
ぐ舟の舟人
騒ぐ波立つ
らしも
千里好山雲
乍斂一樓明
月雨初晴

寐覺の友とす。恐しき山ならねど、梟の聲をあはれ
ぶにつけても、山中の景氣折につけて盡くることな
し。況や深く思ひ、深く知れらん人のためには、これ
にしも限るべからず。(方丈記)

二一 羽衣

風早の三保の浦わをこぐ船の浦人さわぐ波路かな。
「是は三保の松原に白龍と申す漁夫にて候。」
萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨はじめ
て晴れたり。實に長閑なる時しもや、春のけしき、松

大のねき
しき身をもたぬの像さ
つ春の思ふをよとたり

*風むかふ雲
のうき波立
つと見て釣
せぬ先に歸
る舟人。

原の浪立ちつゝく朝霞、月も残りのあまの原、及びな
き身の詠めにも心そらなる氣色かな。忘れめや、山
路を分けてきよみ瀉、はるかにみほの松原に立連れ、
いざや通はん。風むかふ雲のうき波立つと見て、釣
せて人や歸るらん。待てしばし、春ならば吹くもの
どけき朝風の松は常磐の聲どかし。波は音なき朝
なぎに釣人おほき小舟かな。

われ三保の松原にあがり、浦の景色をながむる處
に、虚空に花降り、音楽聞え、靈香四方に薫ず。是、唯
事と思はぬ處に、これなる松に美しき衣懸れり。

末世の奇特
しるし
末世の

寄りて見れば、色香妙にして常の衣にあらず。如何様取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

「のう其の衣は此方にて候。何しに召され候ぞ。」
「是は拾ひたる衣にて候程に、取りて歸り候よ。」

「其は天人の羽衣とてたやすく人間に與ふべきものにあらず。もとのごとくに置き給へ。」

「そも、此の衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。」

「悲しやな。羽衣なくては飛行の道もたえ、天上に



歸らんことも
叶ふまじ。さ
りとは返し
たび給へ。」

此の御詞を聞
くよりも、愈、白
龍力を得、固よ

り此の身は心なきあまの羽衣取隠し、叶ふまじ。とて立退けば、今はさながら天人も羽なき鳥のごとくに

心なきあまの羽衣
の顔を開かざるは
心なきあまの羽衣
こそ、あまの羽衣
衣をかけたなり

せんかたも云々
 舞衣に涙をかき雨路
 の玉に玉髪受をわけ
 玉髪受か枝詞の如存
 花れ、かざしの花を
 び起ししをくとか
 ざしの花と木人とか
 れり
 一をしをとり一を
 ちちちちちちちちち
 とちちちちちちちち
 木人の五衰一夫人の死せ
 んしす時まつ五種
 の死相を理するを
 衰の相といふ、その
 一、髪上の花髪受
 ちちちちちちちちち
 ちちちちちちちちち

て、あがらんとすれば衣なし、地にまた住めば下界な
 り。とやあらん、かくやあらんと悲しめど、白龍衣を
 返さねば力及ばず、せんかたもなみだの露の玉鬘、か
 ざしの花もしをくくと、天人の五衰も目の前に見え
 てあさましや。
 天の原ふりさけ見れば霞たつ雲路まどひてゆくへ
 知らずも。住み馴れし空にいつしか行く雲の羨ま
 しき景色かな。迦陵頻伽の馴れくし聲、今更にわ
 づかなる鴈がねの歸りゆく天路を聞けばなつかし
 や。千鳥鷗のおきつ浪、往くか、還るか。春風の空に

迦陵頻伽
 妙聲鳥と譯す
 津ガルルと云ふ

吹くまでなつかしや。

「いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はし
 く候程に、衣を返し申さうざるにて候。」

「あら嬉しや。此方へ賜はり候へ。」

「暫く。承り及びたる天人の舞樂、唯今こゝにて奏
 し給はゞ、衣を返し申すべし。」

「うれしや。さては、天上に歸らんことを得たり。」

この喜に、とてもさらば人間の御遊の形見の舞、月
 宮を廻らす舞曲あり。唯今こゝにて奏しつゝ、世
 のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶

人間の御遊の形見の舞
 人間の御遊を助け
 んとそれかあし思ふ
 かたやの舞の意
 月宮を廻らす舞曲
 月宮は月世界にある
 宮殿は月天子の
 住む宮殿あらもめ
 ぐる程のちもしあや
 舞曲あり

人に同じ

霓裳羽衣の曲、舞曲
 東遊の駿河舞、舞曲
 此の舞曲、舞曲
 天人の舞、舞曲
 作られたる、舞曲
 といふなり
 つば、伊弉諾、伊弉册
 二神、伊弉諾、伊弉册

ふまじ。さりとは、まづ返し給へ。
 「いや、此の衣を返しなば、舞曲をなさて、そのままに
 天にやあがり給ふべき。」
 「いや、疑は人間にあり。天に偽なきものを。」
 「あらはづかしや。さらば。」
 とて羽衣を返し與ふれば、少女は衣を著しつゝ、霓裳
 羽衣の曲をなし、天の羽衣風に和し、雨に濕ふ花の袖、
 一曲をかきて舞ふとかや。東遊の駿河舞、此の時や
 始なるらん。
 それ久堅のあめといつば、二神出世のいにしへ、十方

十、世界、東遊、西遊
 玉斧の修理、玉斧の修理
 三、五、口、わ、か、つ、て、一、月、夜、々、の、あ、ま、を、と、め、奉、仕、を、定、め、役、を、な、す。
 一月、夜、々、の、あ、ま、を、と、め、奉、仕、を、定、め、役、を、な、す。
 春霞たなび、春霞たなび
 さにけり久、さなけり久
 方の月の桂、方の月の桂
 の花や咲く、花や咲く
 らん。らん。
 天つ風雲の、天つ風雲の
 通路ふきと、通路ふきと
 ちよ少女の、ちよ少女の
 姿しばしと、姿しばしと
 どめん。どめん。
 羽衣、羽衣
 一、二、三、

世界を定めしに、空は限りもなければとて、ひさかた
 のそらとは名づけたり。然るに月宮殿の有様、玉斧
 の修理とこしなへにして、白衣、黒衣の天人の數を三
 五にわかつて一月夜々のあまをとめ、奉仕を定め、役
 をなす。我も數ある天少女、月の桂の身をわけて、假
 に東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。春霞たなび
 きにけり、ひさかたの月のかつらの花や咲く。げに
 花かづら、色めくは春のしるしかや。面白や、天なら
 でこゝも妙なり。天つ風雲の通路吹きとちよ。少
 女の姿しばしと、まはりて、此の松原の春の色をみほ

二一 羽衣

一五

二二 鎌倉室町時代の文學

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに一變す。公卿は政權を失ふと共に意氣沮喪し、武人は兵事に勵めども、文事に疏く、庶民は數度の戰亂に、疲勞し困憊して生活に餘裕なし。従つて當代の文學に雄篇傑作の多からざりしは亦已むを得ざる所なり。當時、専ら武家の祐筆となり參謀となりて文筆に従事したる者は僧侶にして、純文學の如きも多くは其の手に成れり。されば、此の時代の文學に佛教的傾

沮喪しはこゝに失ふこと
困憊しはこゝに弱ること

祐筆——若貴人の側
は當時の常の物かこゝ
とを司りし彼

純文學——和歌漢詩
等をつか

向の存すること、平安朝よりも甚だしく、到るところに無常輪迴の思想を見るは、一は僧侶の手に成れるがため、一は時勢の然らしめし所にして、實に當時の頻繁なる變亂は、社會をして自ら厭世に傾かしめ、盛者必衰會者定離の觀念の、深く人心の根柢に染みたること、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。漢學は平安朝の半ば頃より漸く衰へ、上流の人は尙これを第一の學問となせども、多くは純粹なる漢文を書き得ず、こゝに和漢混交の一種特別なる文體を生ぜり。この文體を以て記したるものにて、最初に

無常輪迴——因果
應報の理はこゝに車
輪の回るが如き、生
ては滅し、滅しては生
れ無常なりと云ふこと
なり
時勢の然らしめし
異れ打ちつらき時
刻の思惟を起さしめ
しをいふ

成功したるは蓋し方丈記なるべし。方丈記は、鴨長明が源平の紛擾たえまなき世を厭ひて、山城の目野に隠棲せることを記せる短篇にして、文辭の流暢なるを以て顯はる。

更に、和漢混交體の大いに光彩を放ちたるは、源平争鬪の次第顛末を記したる軍記類なり。抑、源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞するものをして自ら一種悲壯の感に打たれざるを得ざらしむ。こゝに於てか軍記の作あり。その最初に出でたるものは保元・平治の兩物語にして共に簡勁を以て勝れた

分擾—みかれさめり
流暢—すくすくとして
非—非—しと思ふ
ものかち—感—切する
一時の感—

簡勁—すくすくとして
平家物語—源平の院
の時信濃前司行長

り。ついで出でたる平家物語は、蓋し曲節を附して諷誦せんが爲に作られしものなるべく、縦に雄大悲壯なる戦記を以て貫き、横に哀憐優雅なる物語を錯綜して、其の間にまた幽玄奥妙の佛教趣味を點綴す。されば治承の春を名残に、壽永の秋を西國として落ちゆける、夢よりも果敢なき平家一門が榮枯盛衰の記述には、言々涙あり、句々同情あり、讀む人をして、讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて、佛道に歸入せしめずんばやまざらんとす。その冒頭を、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者

幽玄奥妙—かしら
くか—か—心ゆかし
き—
點綴—かたはら—こたへ

祇園精舎—中—度
た—秋—初—め—観
法—し—の—名—精—舎

沙羅雙樹—
鐘の聲—
諸行無常—
響あり—
花の色—
盛者—

必滅の理を現はす。といふに起して、最後の巻には、建禮門院が後白河法皇への物語に、其の経過せる一生を六道に譬へたまへりといふに考へても、以て其の全豹を推すに足るべし。

源平盛衰記は平家物語に比してその記事更に詳密なり。文章頗る華麗にして漢語を交ふること平家より遙かに多し。太平記は平家物語に倣ひて作れるものにして、後醍醐天皇の即位に筆を起し、爾後五十年間の戦亂の始末を記述す。中興の事業に多大の同情と尊敬とを捧げて起ち、數多の忠孝節義の士

源平盛衰記
平家物語
源平盛衰記の著者は
源平盛衰記の著者は
源平盛衰記の著者は
源平盛衰記の著者は
源平盛衰記の著者は

が事蹟を點綴して、其の間に倫理的・宗教的觀念を鼓吹せるを見る。文體は漢語を用ふること更に著しく、文脈はた漢文調を加へたり。

是等のものと稍其の趣を異にし、率直平易なる文體にて書ける散文に、十訓抄・古今著聞集・宇治拾遺物語あり。いづれも平安朝の今昔物語等に倣ひて、古來の面白く珍らしき事實を輯めたるものなり。

徒然草は、兼好法師の作にして、その趣味を談じ、世態人情を説く間に、著者が修得せる道佛主義の眼鏡によりて、よく皮相の虚飾を透して隠れたる社會の裏

今昔物語集
十訓抄
古今著聞集
宇治拾遺物語
徒然草
兼好法師
道佛主義
世態人情

鎌倉室町時代の文學
二二
源平盛衰記
平家物語
源平盛衰記の著者は
源平盛衰記の著者は
源平盛衰記の著者は
源平盛衰記の著者は
源平盛衰記の著者は

爬羅剔抉
 面を洞察し、爬羅剔抉、痛快にそが矛盾撞著のあるところを暴露せり。文章亦暢達にして雅馴、交ふるに奇句警語の天外より落ち來るものを以てし、かの枕草子と併せて世に隨筆の雙絶と稱せらる。此の外、歴史としては神皇正統記、増鏡等最も見るべし。神皇正統記は准后北畠親房の著にして、建武中興の業破れて王道の衰頹せるを憤慨し、古の歴史に照して皇統の正閏を論じ、三種の神器の在るところ即ち名分の存するところなるを疾呼せるものなり。實に國文を以て綴れる議論文の權輿ともいふべく、

婉曲なる語句のうち、博大なる氣格を藏して、堂々としてまた朗々たり。増鏡は後鳥羽天皇御即位の始より、後醍醐天皇が隱岐より還幸せられしまで、凡そ百五十年間の事蹟を記述せり。記事客觀的にして、毫も著者の主張を交へず。文章流麗にして、よくその模範たる榮華物語を凌ぎ、大鏡の壘にも接せんとす。世に水鏡、大鏡と並べて三鏡と稱せらる。和歌は其の初期に於て最も盛にして、元久二年には後鳥羽上皇の敕により、藤原家隆等新古今和歌集を撰せり。延喜以降、和歌の敕撰實に八度に及びしが、

就中古今と新古今と殊に勝れたり。新古今は其の名の示す如く、よく古今を改造して、加ふるに客觀的敘景の新調を以てし、別途に比較的圓滿なる發達を遂げたるものといふべく、句調流麗、その新奇なることも前古比なしと稱せらる。従つて當時有名なる歌人亦決して少からず。まづ俊成あり、隆信あり、西行あり、寂蓮あり。關白良經は天授の才を以て時流の歌を詠じ、將軍實朝は萬葉の古調を喜びて金槐集を作る。定家は俊成の子にして、家隆と共に名匠の譽一世に高く、前者が措辭の巧緻を喜べば、後者は最

も暢達の調を尙べり。

室町幕府の世になりては、戦亂相繼ぎて鄰戰遠攻に干戈相見えざる日とはなし。一時小康を見たる義滿の代の如き、實は大風到らんとして暫く平穩を持する時の如きのみ。永享に嘉吉に一波は一波より甚だしく、應仁の亂に及びては、遂に急潮突破して、風伯叫び、電將狂ひ、雷神轟く大混亂、京都を中心として天下をこの混沌溟濛の裡に漂はすこと前後百餘年、上下擧つてその堵に安んずることを得ず、怨嗟の聲うたゝ四方に満ちぬ。艷麗なる百花は平和なる

風伯—風の神

春にこそ咲き誇れ、かくすさまじき亂離の秋にいか
 てか榮えん。されば文學の如き、全く度外に置かれ
 て、毫も發達すべき餘裕を存せざりしなり。
 されど應仁の亂までは、流石に幕威尙地に落ちず、殊
 に將軍義満は、柔弱にして遊樂を好み、義政は戰亂に
 遭へりと雖も社會の辛酸を知らざるが如く、それぞ
 れ閑居を設けて文雅風流を樂しめり。されば水墨
 の繪、香茶の技などの發達せしもこの時にして、能樂
 の勃興に伴ひて當代唯一の文學、謡曲を生じたる實
 に此の時代なりとす。

北畠の繪
 墨の繪

亂離の秋
 一六

謡曲は蓋し當時の僧侶の手になりしもの多かるべ
 く、その中多く佛教の思想を含む。趣向は幽靈顯は
 れて往事を語り、巡錫の途なる名僧知識の回向によ
 りて成佛するもの多數を占む。詞句は好んで古文
 辭を補綴すれども、よく皆諧和して球を轉ずる如き
 好調に富む。

能樂の餘興に狂言といふものあり。その技、能樂の
 嚴正なるに對して滑稽を旨とし、多くは罪もなき失
 策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの
 多く、巧に人情の弱點を捕へて、誇張過大の脚色よく

回向
 巡錫
 錫杖
 佛
 僧
 幽靈顯は

人の頤を解かしむるものあり。その文は當時の言語をその儘に寫せるものにして率直愛すべし。之を要するに、この時代は多少特色ある文學を産ぜざりしにはあらざれども、上に平安朝を承けてその後殿たり、下に江戸時代を起すべき先驅たり、まづは兩盛時を繋ぐ連鎖たる時代と謂ふべし。

(日本文學史教科書に據る)

師範學校 國文教科書 本科用卷五終

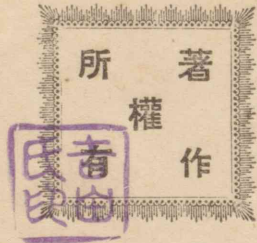
師範學校國文教科書本科用卷五

文部省檢定

明治四十五年二月三十日 師範學校國語教科書

明治三十六年五月五日印
 明治三十六年五月八日發行
 明治三十七年二月廿六日訂正再版印刷
 明治三十七年二月廿九日訂正再版發行
 明治四十五年二月九日訂正再版印刷
 明治四十五年二月九日訂正再版發行
 明治四十二年二月廿八日訂正十二版印刷
 明治四十二年三月三日訂正十二版發行
 明治四十四年五月十三日訂正十三版印刷
 明治四十四年七月十六日訂正十三版發行

正 卷二、三、五 各金三拾五錢
 價 卷三、四、六 各金三拾錢



編者 吉田彌平
 東京市小石川區高田老松町五十二番地

發行者 上原才一郎
 東京市神田區裏神保町六番地

發行所 光風館書店
 東京市神田區裏神保町六番地
 (電話本局二千三十九番)
 (振發貯金口座東京三二七番)

印刷者 四海民藏
 東京市神田區裏神保町六番地

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

